



詞藻





第一冊 新體詩集

『文庫』記者編纂

新體詩集

明治廿九年三月發行
東京少年園

詞藻目錄

第一冊	新體詩集	(三月發行)
第二冊	詩集	(四月發行)
第三冊	歌集 附俳句	(五月發行)
第四冊	小説	(六月發行)
第五冊	(未定)	
第六冊	(未定)	

六冊前金拾八錢
 郵稅拾貳錢
 各冊定價同
 各冊定價同

序言

世に新體詩集の書なきにあらざる、然れども専門詩人にあらざる青年の手に成るものは、此書を以て嚆矢となす。本書採録する所數十篇、何れも純潔なる青年が、刻苦精錬の餘に成りしもの、其學識名望に於ては、素より知名の大家に比すべきにあらねど、其神來の妙想を發揮して、一點の塵氣を帯びざることは、優に先進を凌ぐ所あらんとす。時に句調の佶偈なるものあらん、又文字の生硬を免れざるものあらん。是れ蓋し攻學未だ久しからざる自然の結果にして、敢て深く咎むるに足らず。唯其歌ふ所の、奕々として活氣あり、瀟々として天真を包み、想をすること春禽空を翔けるが如く、思を驚ること秋花野に亂るが如く、自由の其適を適として、更に名利の爲めに動かさるゝの痕を見ざるは、唯これを青年の作中に得るのみ。是に於て、吾人は切に作者諸君に望む、兄等他日詩壇に雄飛せんと欲せば、潜心熟慮宜しく大器の晩成を期せよ。縦ひ名を成すの曉に至るも、徒らに得々たる勿れ、須らく當年の意氣を失はざらんことを努むべし。吾人不敏なりと雖も、兄等が名を成すに於て、豈一臂の力を惜まらんや。茲に前途多望の小詩人を紹介するに方り、聊か滿胸の喜びを記す。

明治二十九年紀元節

編者識す

月下吹笛	(伊良子暉造)	三十三頁
幽靈	(幽花)	三十五
秋夜里川	(小萩)	三十七
處女心	(門田擬叟)	三十八
みだれ咲	(枯柳)	三十八
山寺	(甲城)	四十
八重の浪	(與謝野修)	四十一
うば櫻	(間瀬安一)	四十二
白骨	(文廼家秋雨)	四十三
今日の骨	(坂内無腸子)	四十四
たが寫真	(菰田堂)	四十六
濱邊の夕暮	(みよしの)	四十六
厭世詩人	(三千童子)	四十八
冬は來ぬ	(碧水生)	四十九
蟲の音を聞きて	(半井一枝)	五十
くすしの家	(細田霜雁)	五十一
郷先生	(伏龍)	五十二
月の鏡	(和郷生)	五十六

茅渚海	(蕁庵)	五十七
我おもひ	(灘川)	五十八
有澤橋晚景	(堀重里)	五十九
豆うる乙女	(更月生)	六十一
我が妹	(奥原幽芳)	六十三
漁人	(紫水)	六十四
草枕	(後凋)	六十四
貧女	(日野次郎)	六十六
冬休みに友を送る	(松華)	六十七
門の青柳	(西女佳人)	六十七
心の闇	(堀井長眠)	六十八
雁の一つら	(一櫻堂主人)	七十
萩ふく風	(竹内水彩)	七十二
此世	(枕肱子)	七十三
水車	(瀬戸重次郎)	七十四
わかれ	(鈍太)	七十五
ななみ	(伯水漁夫)	七十六
漁夫	(K U)	七十六

詞藻

新體詩集目次終

別後戀	……………(和多野姑洗)	七十七頁
幼なじみ	……………(近森香村)	七十八
鳴の羽がき	……………(吉野甫)	七十九
墓邊の櫻	……………(壁崖)	八十一
田舎工女	……………(酒井すが子)	八十一
新嫁	……………(竹田翠陰)	八十二
夜の休み	……………(紅雪)	八十三
孤衾	……………(紅涙子)	八十四
月下聽琴	……………(小出清)	八十五
きぬた	……………(西林知義)	八十六
兄上	……………(秋雨)	八十六
田舎雜詠	……………(斯花庵)	八十七
彫む我が名	……………(松蔭三栗)	八十八
常盤雪行	……………(さゝのや)	八十九
しづの思	……………(鶯谷子)	九十
花吹雪	……………(二十六篇)	九十一

詞藻

新體詩集

(明治二十九年二月發行)



小百合

幽

泉

梢を染ひるもみぢ葉に、
 秋の夕日のかけ消えて、
 利鎌の月のかげくらく、
 薄かるかや枯れはて、
 草葉の露にすそぬらし、
 河風さむく身にしみて、

わこがれつゝも奥深く、
 ふもとの寺の鐘ならん、
 そまの通路とめくれば、
 野わけふさしく荒野原、
 鶉のどこをふみわけつ、
 何處なるらん微かにも、

山より峯とたどる間に、
 諸行無常とひやくなり、
 見渡す限りさびしげに、
 家路も分ずなりにけり、
 名無の川に沿ひ行けば、
 琴のしらべぞすみ渡る。

かゝる寂しき野ら乍ら、
如何なる人の手調をも、

光をあてに來て見れば、
野菊ひともと咲き残り、

あるじやおはす物申す、
家路に迷ふたびのもの、
しばし宿して玉へかし。

こへば主はいらへせり、
厭はずあらばいざ玉へ、

さすがに人や住みぬ覽、
訝かしみつゝ猶ゆけば、

誰が世を忍ぶ庵ならん、
妻戸の内にあるじかも、

終日もみぢ狩りくらし、
わはれ一夜の露と見て、

賤が伏屋のいふせきに、
かゝる詫びしき山住の、

ゆかしき音の聞ゆるは、
燈火ひとつほの見ゆる。

枯れし尾花が袖かきに、
しはぶく聲ぞ聞ゆる。

山のにしきを着て歸る、
さみが庵のくさの葉に、

草のむしろは露けくも、
參らす物はあらねども。

人のこゝろの花になり、
玉なす聲のうれしさに、
つゆにやつゝ姿なり。

柴をもやしつ爐の邊り、
粟の飯もやまゐらせん、

それは雪ふる夕まぐれ、
如何はせんと思ひしに、

花なす君がいかなれば、
かくや詫くおはすらん、

まかおはさずは脊君と、

うつろひ變る世の中に、
願ふとよびて入ぬれば、

佐野の昔にあらねども、
召させたまへと艶女は、

今は紅葉の散るころや、
計らず君がなさけにて、

かゝる處に住みたまふ、
いかにと問へど艶女は、

人目のせきを忍びつゝ、

なさけも厚き言の葉や、
主と見しはひめ百合の、

いざよりたまへ客人よ、
微笑さしてしはぶきぬ。

家路にまよふ旅の身の、
餓も寒さもわすれたり。

おもふ縁のつれなくて、
只くらなしの物言はず。

世を樂くやおはすらん、

今宵は人のあらざるか、

なほたをやめは一言の、

返す言葉もなかりけり、

暫し有しがたをやめは、

させる樂みありもせば、

如何に此世や住よけん、

妾は小百合と呼るれど、

こゝろにさえぬ病人の、

有て甲斐なき此身なり、

抑や妾のなやめるは、

人の厭てふいたづきの、

有が中にもいまはしと、

語ひさしてたをやめは、

身うち振はし咳ふきぬ、

目には涙のつゆをきて、

されば薬師の勧めにて、

里人遠きこの野らに、

三年の秋をすごし來ぬ、

母なる人もおはし、が、

過にし夏のまがつみに、

返らぬ旅にいでましぬ、

今は此世にたゞひとり、

消えをまつまの朝露か、

霜夜に詫るこほろぎの、

こゑよりはそきこの命、

頼みなき世に永らへて、

猶も浮目を見つるなり、

春はかすみにも、鳥の、
野には千草の微笑むも、

友よぶ聲ののどけくも、
消えを急げと言ふ如く、

木々の梢にはなさきて、
散るを待間の山ざくら、

夏は河邊にとぶはたる、
可笑と人はさゝぬれど、

峯の古巢のほどゝぎす、
妾は血にぞむせぶある、

哀れと人は言ふめれど、
胸もこがれむ計りにて、

秋は草葉に置くつゆや、
優しと人はめづれども、

垣根にすだく虫のこゑ、
病める妾のこゝろには、

玉とし人はうたへども、
何れなみだの種となる、

冬は落葉の散るおとに、
何に例へんかたもなし、

かくや千鳥の聲こゑに、
哀れと君もおもひてど、

夜半の寢覺の悲しさは、
また艶女はしはぶきぬ、

語らひさして艶女の、
あらしになやむ海棠の、

身うち振はし苦しげに、
雨にぬれけん心地して、

しはぶく様の哀れさは、
見るさへいと哀なり、

げにも思はぬ事なりき、
 わきて疾病あるみには、
 よしなき事は思はずに、
 われもをりく音信む、
 小百合の君よ君はしも、
 胸苦しくもおはさずは、
 奏つるとには非ずして、
 風雅になれし君なれば、
 されど妾のかなですは、

さみに疾病あらんとは、
 心からこそ癒えもせめ、
 心のどかにませよきみ、
 都にかへるそのときは、
 琴をやひかせ玉ふらん、
 遠音に聞しばかりにて、
 心やりにとおぼえてし、
 聞かせ玉ふも中なかに、
 術な惜むと思召すらん、

さはさりながら何事も、
 心からこそなやむなれ、
 百年ささくませよきみ、
 薬もどめてまゐらせん、
 然はかなで聞してよ、
 いよいよ心の残るなり、
 拙なきわざに侍るなり、
 をこがましくは侍る也、
 かくもいひつゝ艶女は、

手馴の小琴とりいで、
 露の消ぬ間の朝顔の、
 未だ世も知らず散ぬ覽、
 優しきこゑに歌ひつゝ、
 いとも濕りて聞えけり、
 語るにながき秋の夜も、
 朝よく風のさそひきて、
 假りの宿と云ひながら、
 たんとすれば艶女も、

かなでそめしは今様の、
 夕影またぬ命にて、
 かなづることの爪音は、
 調べ終りてたをやめは、
 明方ちかくかりにけん、
 ねぐら離るゝ鳥さへ、
 さすがに心の残れども、
 おなじ名残や惜むらん、

哀れさ深きしらべなり、
 咲く間短き花なれば、
 月の水にやかよふらん、
 涙ながらにしはぶきぬ、
 み寺にひく明けの鐘、
 彼方の森に音をぞ鳴く、
 果しなければ然ばよと、
 斯も言ひしぞ哀れなる、

ひとつ木蔭の雨やどり、
かりの玉梓たましくに、

おなじ流れに舟さすも、
音信だにもしてよかし、

縁てふことありぬれば、
暫て消ぬべき身なれども。

いと哀の身にしみて、

ささくたませよ百年と、

涙ながらにいらへして、

門に出ればたをやめは、

暫し願ふとよびかへし、

まはぶきながら斯言ぬ。

何れ妾の消えしとも、

聞かせ玉はった一度、

君がなさけの手に結ぶ、

手向の水をねがふのみ、

然ばとばかり門さして、

むせぶ聲のみ聞ゆなり。

我も袂をまぼりつゝ、
どぶやからすの只一羽、

家路たれば悲しげに、
顧みすれば枯れ尾花、

二聲三聲なきすて、
まねくも心ありげなり。

期々誦す可し。是も亦露宿の題にて投寄せられたるものなれど、聊も願意に適せざりし故、選中には加へざりき。脚色は既に露伴の對調較より出て、世多く之を用ゆ。唯格調の暢和自然にして少しも斧鑿の痕なきは、敬服の外なし。

露 宿

かゝり火の翁。

散りしける、花に埋れて、木の下に、 肱を枕に、 うまひせる、 人ぞありける、 行春
を、 惜し、とこち、 散り残る、 花を尋ねて、 人皆は、 西に東に、 さまよへど、 汝
は木蔭に、 宿しめて、 夢にや春の、 行末を、 追ふて行くらん、 魂は、 散り來る花に、
打乗りて、 蝶となりけん。

花に寝て夢に行春の惜きを追ふ、何ぞ逸興の高雅なる。

露 宿

上總、小 梅。

右も左も 不知野に、 たゞ我ひとり 旅の空、 是よりさきは 道とほく、 是よりあとに 家
もなし、 夜はおひくゝに ふけゆきて、 行くにかへるに すべなき、 淋しき松の 下蔭
に、 草を枕に うたゝねの、 玉の白つゆ 衣におち、 ふけゆく空に 月寒く、 身にしみ渡
る 雁の聲。

露 宿

岩手、半 狂 子。

〔一〕修羅の野末に吹き渡る、〔二〕皇國の爲めに身をつくし、〔三〕千草にすたく虫の音も、

風は血しほになまぐさく、つれなき風にさそはれて、いつしかやみて小夜ふけぬ、

草間の屍にさえ渡る、ちるや草葉の白露と、晝のつかれにまどろめば、

月影すこくふくる夜に、覺悟極めし大丈夫が、寄する人馬の足の音、

戈を枕のかりのやど、腰に佩きたる日本刀、間近く聞えむねさわぎ、

敵や寄すると眠られず。つかのその間もゆるみなし。腕をさすれば意氣高し。

〔四〕嘶く馬の聲高く、〔五〕目ざすは敵の大將と、〔六〕鳴きつゝ渡る雁がねに、

一鞭あて、かけ出し、馬の頭を立て直し、雄々しき夢は破られぬ、

群がる敵のたゞ中を、勢たけく進み打ち、草葉を渡る秋風は、

蹄にかけてまつしくら、日頃きたへし我腕の、骨を透していと寒く、

虎の羊をかるがごと、切先さゆる一刀に、屍照せし宵の月、

風に木の葉のちるがごと。電光一閃討ち取りぬ。尾花が末に入りにつけり。

露宿に夢を描せしは一趣向なり、蒼涼にして奔放、まゝ用ゐる漢語の如きはわざと削らす。

露 宿

秋 田 刈 穂。

時もどめてをちここに、

あどに見すて、夕つく日、

四方の野山は黒みつゝ、

川そひ路に行きくれて、

踏み行く道の草の葉に、

月は東の山の端を、

何處とさして行く水の、

今よひは此處にふし芝の、

宿借す人のなしとても、

どくより吾を松蟲の、

月に心を見がきつゝ、

草をしとねのたび枕、

雁の翼にうち乗りて、

とびかふ鳥の鳴く聲を、

はや山の端に入りにつけり。

里はいづこと白浪の、

主と頼む花もなし。

おく白露のいと清く、

高くはなれてかゝやきぬ。

行ゑ定めぬ旅なれば、

一夜は許せ蟲の宿。

如何でかかこつ事やある、

呼びどいひるもある者を。

水に心を洗ひつゝ、

いつか夢路を辿りけり。

月の光をたどりつゝ、

雲井を分けて上るらん、

月の宮ゐに迷ふらん。

(青嵐刪修)

此刀

浦

次。

『あはれ父上げさもまた、
 『こや吾子汝はいかなれば、
 家に生れし身ならずや、
 『否とよ父上われはよし、
 病の床にふし給ふ、
 日にく衰へ給へるを、
 喃ち、上よ母上を、
 『お、いとし子よ汝は未だ、
 されど妾の此やまひ、
 飢ゑて死ぬとも惜まねど、
 いたく餓ゑてぞ侍るなる。』
 斯るさもしき言の葉を、
 年はな、つに足らずとも。』
 終日食はずありとても、
 母に薬もすゝめ得ず、
 昨日も僅一たびの、
 いとしと思ひ給はぬか、
 年端も行ぬ身なれども、
 わらゆるすべを竭す共、
 吾子は生先はるかなり、
 我にきかすぞ武士の、
 堪得ぬ事はあらざれど、
 三たびまゐらす物もなく、
 食をば羞め申し、のみ、
 寒さも痛く強かるに。』
 親をおもふの切なさよ、
 愈えなん時はなかるべし、
 せめて三度の食なりと、

飽かせまほしき吾夫よ、
かくは苦しめ給ふらむ。』

吾子には罪もあらざるに、

いかなる神の崇にて、

『愚の言よいかなれば、
いかに歎くも詮どなき、
よし〜我に術どある、
食にあかすも束のまど。』

神を恨まむ恨むべき、
さはいふもののかてなくて、
吾子よかへらむ夫迄は、

これ皆運とあきらめよ、
玉の緒つなぐ由もなし、
母をまもりて忍び居よ、

破れたる布衣身に纏ひ、
嵐の中をたゞ一人、

雪は巴とふりしきり、
我家を出で、足速く、

風さへ強く吹き荒む、
何所をさして行くやらむ。

刀 商ふ家の門、
『あはれ男子と生れ来て、
人の花てふ武士の、
離すまじとぞ思ひたる、

佇立むうちも猶ほ思ふ、
四十路の坂を越えながら、
萎れ果たる哀れさよ、
此つるぎ迄賣らむとは、

此有様はなに事ぞ、
いかなる事の有連も、
おもへば昔わが君の、

下したまひし此劍、
 賣らば復とはおのが手に、
 さなり〜』と點頭つ、
 またも心に思ふやう、
 口には強く叱れども、
 かくとは知らず無情と、
 我すら堪へぬくるしさを、
 其を知り乍ら無情は、
 今日迄忍び居たるなれ、
 不義の奴といはれても、
 かくと心を定めつゝ、
 しばし眺めてハラ〜と、
 妻子の上やしのふらむ。

孫子の末に傳へむと、
 かへらぬものをいつ迄も、
 もどきし路にかへらむと、
 『空しくかへらば待わぶる、
 心のうちの切なさは、
 我を恨むは憾みなり、
 かよわき女髻髪子が、
 またとえられぬ此刀、
 されど今はた忍び得ず、
 汝が爲にはあらぬ名も、
 門の戸あけんと右手を掛、
 露か涙か白雪の、

おもひし事もあだなれや、
 命に代へて離すまじ、
 二歩三歩すゝみしが、
 妻子が上をいかにせむ、
 胸もさけなんばかりなり、
 否々それも理りぞ、
 争で忍ばむ忍ぶべき、
 手離す事の最惜しく、
 不忠の者といはるとも、
 我はいとはぬ覺悟也。』
 左手に握る實刀を、
 かゝる袂をはらひつゝ、

少しの瑕瑾はなきにあらざり、恩愛に率かされて苦悶する様、描し出て甚だ真率、翻案の手際も上出来の部なり。

此花衣

(詩翻案)

烟村子。

忘れもやらぬ五とせの、
 くだしたまひし花衣、
 『こはこれ母が父君に、
 裾のあやさへ糸櫻、
 壽く爲にとらすれば、
 いとゞやさしき御言葉に、
 わざと上着に重ね着て、
 母上なくもならせは、
 折ふし毎に出し見て、
 かはりゆく世の習とや、
 病の床にはしなくも、
 さすが榮えし此家も、

むかしの春よ母上が、
 かはらぬ色を思ひきや、
 そひまゐらせし其折の、
 ながく榮えの心なり、
 母のつきそふ心して、
 たゞ嬉しさの限なく、
 赤らむ面とてりそへる、
 かたみの品と一しほに、
 その面影を忍びしを、
 祝ひし甲斐もあらしゆく、
 就きたまひしを初にて、
 衰へゆけばさのふまで、

我身を近くまねかせて、
 思の種とならんとは、
 晴着の品のひとかさね、
 今しも汝が行先を、
 永く汝が身にきよかしと、
 此家に来てし其夜にも、
 色香を人に見られしが、
 心つけつゝをさめおき、
 めぐる月日に小車の、
 秋の一夕わが夫の、
 起りそひたる禍に、
 親しみ來しも疎みゆく、

人の誼といふものは、
 味氣なき世をかこつのみ、
 いつしかこゝに早や三年、
 はるゝ思も消えがての、
 さばれ我身は食はずとも、
 なやませ玉ふ我夫の、
 代にかへなん物もなし、
 賣らば多くも得られじを、
 まかせまつりて只今の、
 またなき母の忍ばれて、
 可もなし、不可もなし。

榮ゆる時にかぎれるか、
 持てる品を賣代に、
 世は幾度か春くれど、
 竈のけぶり今ははや、
 一日二日はともかくも、
 薬をいかで欠かされん、
 残りしものはこれをのみ、
 うらずば今日をいかにせん、
 此苦をしのがんと、
 憂こそまさされ今更に、

まだ世に馴れぬ我二人、
 朝夕とさへ来て、
 幸なき二人いつかまた、
 あども絶えなん斗なり、
 年月ながくいたつきに、
 とはいへ今は何か又、
 我には惜しき此衣も、
 いで此上は神々に、
 心さだめて手にとれば、

ねがめがちなる我夫に、
 涙に色もあせぬらん。

心おかれて泣き伏せば、

見ぬわかれ

作者詳ならず。

すゝびたる、
 ゆかしきは、
 あやしげの、
 かうくくと、
 あさゆふに、
 なにとかや、
 あなうれし、
 ひらをさは、
 うちじには、
 うみふかく、

鴨居に錆びし 手槍かゝれり、
 この庵にすむ 主人のこゝろ、
 火桶いだきて 主人は迎へぬ、
 裏のはやしに からす騒ぎて、
 こゝろ痛めし ことびの戦ひ、
 わが子太郎も うち死せしと、
 斯ありてこそ 太郎はわが子、
 羽織のそでを 叩きて去りぬ、
 そも誠かや 太郎よたらう、
 水漬かばねど なりにし太郎、

むしばめる、
 けさはしも、
 むらをさは、
 いなすゝめ、
 みいくさの、
 いさぎよき、
 いざさらば、
 くもる目を、
 あなくやし、
 いまひとめ、

どこに一口の 太刀を飾れり、
 村長のきみは 音づれにけり、
 殿めしげにも 髯をひねりぬ、
 門田にむれて ちゆくと鳴。

勝ときくこそ たのしの極み、
 最後を遂げて 譽れをえしと、
 ひらをさの君 いざくさらば、
 しばたきつ、主人は送りぬ。

うみ山とはき えみじの國の、
 見たし見せたしなれの面かげ、

きみのため、み國のためとわきらめながら、かなしきは、
ながたぬに、すゑ松か枝の、千歳をかけて、さかゆべく、
契りおきたる、少女のあるを。

結び得て何等の機敏、餘韻嫺々、汲めども竭きず。

見ぬ別れ

長 眠。

春や昔のはるならず、わが身ばかりは變らねど、
叫べと呼べど甲斐もなき、涙にぬるゝわが袖に、
宿るも悲し月の影。

思へば一年都なる、文の園生にわけ入りて、
いやに立ちまふ春かすみ、まなくなびけど君とわれ、
心の奥はへだてすな。

へだてはせずとさみだれの、ふるや軒端に郭公、
ゆかしき君が玉章に、思ひはいとますかゝみ、
名のりそめにし其日より、
うつるこゝろの嬉しさに。

吾からわれと千代かけて、契り交はしゝうつしゑに、
をしの片羽のかた思ひ、それかあらぬか外にのみ、
うつるこゝろのあらばこそ、
過ぎ行く鴈をうらめりき。

夏もいつしか過ぎがての、木の下かけの岩清水、
契りし君がまごゝろと、比へ過ぎしを今更に、
いやに清めればとことほはに、
涸れはてんとは思はめや。

思へど猶もおもはるゝ、君がこゝろに昨日今日、
鴈の音づれしばらくは、雲井のよそになりぬれば、
いとゝわびしくすこしけり。

わびていぬれば夢にだも、君が許のみ慕はれて、
いやにぬれ行く手枕は、げにしばの野の暫時だも、
しげくも露のおきまさり、
かはくひまでとてあらざりき。

あらぬなげきに沈みつゝ、信田の森の楠の、
亂るゝ胸の思ひ草、荊りて掃はんよしをなみ、
それならねどもいや千枝に、
まどふこゝろをそらにして。

身をもちりねの旅枕、
わびしところは思はねど、

君を尋ねてはるごと、
ねざめくるしき宵の間は、

思ひ越路の露の床、
鹿さへ哀れねをそへて。

世を秋風のふきあれて、
だゝ怨みにしわがこゝろ、

路を落葉の埋むれど、
斯としりせば如何ばかり、

よそと見れば君をのみ、
甲斐なき者とやおぼしけん。

君や逝きぬと夢にだに、
怨む甲斐なき常世べは、

夢見ることのありもせば、
むがふす雲のいや深く、

如何でかかくは怨むべき、
尋ね入るべうおもほはぬす。

積れるうさをば晴しつゝ、
つきぬ契りを交はんと、

いつかは君ともろどもに、
頼みしことや仇なりし、

とはに變らぬ妹とせの、
仇なる世とはしりつれど。

遺身にのこるうつしゑは、

昔の儘にゑがほさへ、

いとらふたけく見ゆれども、

逢はでわかれし現し身の、

君はいづこかしらくもの、

幾へのをとをやかくるらん。

しるしにのこるいしふみに、
猶ほぬれまさるわが袖を、

さざみてけりし文字をだも、
かたしきつゝもよもすがら、

今日は涙だにのみぬねば、
わびしき夢を結ばなん。

心しあらばあはれ君、
忘れずあらばあはれども、

夢にそれとも見え玉へ、
おもほし玉へあはれ君、

契りし己がまごゝろを、
常世の道はへたつとも。

折しも吹きくるさよあらし、
哀を告ぐる鐘の音も、

尾花が袖を吹きはらひ、
尾の上の松に答へつゝ、

近きみ寺にひやくなる、
心細さを添ふるなり。

別れと言ふ意には甚だ重きを置かざりしが如し、且つ冗漫の弊を免れず。

見ぬわかれ

雲と霞を關なれば、

海と山とを垣なれば、

遇ひ見る事もあまの川、

薔薇園主人。

年に一度の逢瀬てふ、

柳機姫のそれよりも、

はかなきものは我身なり。

われより二つ下なりと、
やうく景色をひそめし、

父の言葉にかゝるへば、
まだ春浅き梅の花、

三五の坂を今越えて、
おぼつかないけに匂ふらむ。

其面影は知らねども、
目には情の露罩めて、

其言の葉は聞かぬども、
口はエデンの花園に、

君が送りし寫眞の、
咲きし薔薇の匂ふごと。

涼しき蔭の築山の、
歎に寄る緋鯉ながめつゝ、

芝生細に座をしめて、
ほゝ笑む顔に愛らしき、

藍をたゞへし泉水の、
靨を見るはいつならん。

幼なごゝろの過ぎ去りて、
月に飛び行くかりがねの、

戀知りそむる今日頃は、
頼みかたなをはかなみて、

かきつやぶりつ文かきて、
獨りおもひに沈むらん。

*

*

*

*

*

*

鐘の音更けし眞夜中に、
電報取りて讀み行けば、

柴の戸叩く音しげく、
我が戀人のかなくも、

夢破られて我れはしも、
病に死せししらせなり。

われを此世に残しおき、
我が寫眞を手を持ちて、

世をのがれ行く心には、
放たじものといまはにも、

いかに悲しく思ひけん、
忘れざりけん我うへを。

あゝ墓なしやうたてしや、
互に思ひ思はれし、

我れも君には遇はぬなり、
久米の仲橋今日断えて、

君も我れには遇はぬなり、
見ぬ別れとぞなりにける。

筆未だ圓熟せず。

見ぬわかれ

愛

琴。

身をやく炎くるしきに、
世を秋風のいづ方と、

消もやすると頼みつゝ、
行衛定めぬかしま立ち、

遠つかみよりすみなれし、
出る心のはかなさは、

この故郷をふりすて、
あはれみ玉へ天地も。

あとにゆかりのあらざれば、
苦の下なる父母よ、

代々の墓しほもうづもれん、
わが身の罪をゆるしませ。

あはで別れし、面影の、
迷ふ心を打ちおさへ、

なご心には、浮ぶらひ、
とはで出でにかひもなや。

思へば人のあやしむ、
むつびあひにしかななるを、

ふりわけ髪のむかしより、
いとまごひだにささずとて、

どはぬはとふにいやまして、
知らぬはおなじ君さへも、

深ふかき心のあればなり、
うらみたまはんよそながら。

いはでの山に年過ぎて、
朽ちて行べき身にしあれば、

はかなくこゝに埋木の、
今更なにかかたらはむ。

いもせ事して遊びにし、
今のおもひのくるしさも、

昔は夢となりはてぬ、
夢ゆめとなるべき時やいつ。

背おふ包は軽けれど、
足のはこびもたゆたひて、

千々の思をおさめては、
袂たもとに露ぞ重るなる。

道の千艸をうらぶせて、
迷ひの雲に浮ぶなる、

身にしみわたる朝風よ、
かの面影を拂へかし。

多恨多情、斯る詩の常として浮華に流れ易きも、此篇沈厚にして温雅、少しも輕佻に傾かず、三文庫二に掲出せる君の作「露宿」に比して遜色なし。

霜 枯

宮城 芳 浪 子。

木がらし寒き夕まぐれ、 村の細道たゞひとり、 眞柴背おひつ駒ひきて、 家路にいそぐ乙女あり。 みどりの髪はみだるれど、 花のおもかけ消もせで、 小聲にうたふ夷ぶりの、 調べ床しくきこゆある。 夕日のかげは失せ行けど、 家路のほどや遠からん、 おくれ鴉もこゑたえて、 乙女のうたのみ残りけり。

* * * * *

軒端はくちて傾けど、 昔く人もなき賤が家の、 中にもしびほの見えて、 門邊に老女只ひとり。 折りから駒の聲のして、 乙女はこゝに辿りきつ、 やれし小垣のそともより、 母上なうと呼びにけり。 老女はおうといらへつゝ、 燈火あげつ今こしか、 今日北風さむけきに、 いとど歸りの待たれしを。 山路はさぞや寒からん、 いろりに櫓も入れ添へぬ、 夕げもすでに調へぬ、 いでやつかれを休めかし。 いたはる母の言の葉に、 乙女はゑみを洩しつゝ、 ふかき木立の中なれば、 山邊はさしも寒からず。 木こりの業もいつしかに、 なれて楽しくなりにけり、 こゝろなかけを母上よ、 共に夕げを食べなん。 やがて乙女は戸の外に、 いなゝく駒

を指しつ、 さても母上あの駒に、 つきて語らん事ぞある。 今日しも柴を折りつみて、 負ひ歸らんと思ひつゝ、 背おひしかども中々に、 重き柴木をいかにせん。 負はんとしては負ひかねつ、 捨てんとしては捨てかねつ、 たゆたふ折しも誰やらん、 里の子ひとり來りけり。 ためらふ我を見てしより、 いかに憐れと思ひけん、 樵りし柴木を引きて來し、 駒におはせて語るやう。 くるゝ山路にさぞかしな、 うら悲しくやおぼされん、 こよひ一夜はこの駒を、 おん身にかして參らせむ。 家路は遠くあるなるに、 さぞな母御も待ちつらん、 いざ歸りませこの駒は、 あすの日こゝにまちうけむ。 とばかり言ひて里の子は、 駒をわたして去りにけり、 見送るおのがうれしさの、 涙のこゑも跡にしつ。 つれなき浮世にかくばかり、 やさしき人のあるやらん、 里の童とわが見しも、 神の恵のみつかひか。

* * * * *

老女はしばしうちむきて、 言葉もあらず乙女子の、 みだれし髪をかきやりつ、 言はんとしてはまた搔きつ。 一ツ小川をわたるにも、 ひとつ木かげの宿りにも、 えにしある世の習には、 洩れぬ此世ぞたのもしき。 汝は知らぬとおもへども、 えにしもあらぬ人ならば、 一夜の程もたれかまた、 駒をかすべきものやある。 駒かす人はたれやらん、 駒かる人はなにならん、

えにしの手綱おればこそ、駒もひかれて來つるなれ。言ふも昔のしのばるゝ、汝が父君の世にありし、頃は我家もとみさかえ、時めきたりしものなりき。春のさかりも夢なれや、あらぬ嵐に父君の、はかなくなりし夕より、家も傾きそめにけり。されど父君世にありし、さかりの春のその時に、行未かけて汝が夫と、ちぎりかはせし稚兒ありき。あはれ父上ましまさば、我家もながく富みさかえ、その契りをもまのあたり、見るべかりしをかなしやな。駒をかしけん里の子を、それとも知らぬ汝が身の、來しかた行末思ふにも、胸もはりさく心地して。言へどつくさぬわが心、語れどつきぬわが思、神もあはれとおぼしなば、せめては汝が行末を。かけて頼むと言へばへに、後は言葉もなかりけり、うつむき伏せる乙女子の、髪をまたもや搔きやりつ。

夜はふけ行けどほのくらし、燈火なほも残りけり、あはれ軒ばにつながるゝ、駒に心はわらずども、一夜の主を忘れめや。

結構甚だ面白し、語調亦逼らすして老手の風あり、感服。

かの君

自 月 生

(一) 別れてしよりかぞふれば
三年あまりとはやなりぬ
あはれかの君いまいかに。

(二) 花のみやこにはるたけて
ふさくる東風のはのかにも
聞けばかなしき人の身や。

(三) たのむ木影もあらしふく
世に捨てられて濁り江の
水にすがたをうつすとや。

(四) むかしのさまもなみ風の
荒さうき世とあさ夕に
哀しがるらんいかばかり。

(五) 世に立つ術もなくなみだ
拭へどくもる小かいみに
向ふこゝろやいかならん。

(六) こゝろにもなきもろ笑靨
深き理由をもひとはず
たゞしづの女と見渡して。

(七) 身は塵ひぢにけがるども
やは穢すべき真こゝろを
世に知る人もなくてやは。

(八) 近見のやまのとはからず
かゝるべしとはしら雲の
かゝるもつらし君が身に。

(九) 實にかあらぬかわか草の
しげき思ひにわれありと
告ぐる術もがつてをえて。

(十) 悲しきかなやいづことも
知らでたづぬる術もなし
あはれかの君いまいかに。

人間苟も神より受けし心あらば、誰か濁り江に染むを潔しとせん、かの君たる者、之を讀んで何等の感をかかず。

寒 月

愛 櫻 子。

松吹く風の音たはて、 更るを告る山寺の、 鐘はかすかにひびきつゝ、 里ある方に聞ゆるは、
夜を警しむる犬の聲、 さゆるも寒き冬の夜の、 月はくまなくてらしつゝ、 森の樹陰にふくろふ
の、 聲物すごき池の邊の、 枯れたるあしをかきわけて、 たどり來れる女あり、 月も耻づ可き
顔も、 うれひの雲のかかれるか、 目にはなみだをたへつゝ、 みだれし髪を幾度か、 拂へ
ど猶もはつれつゝ。

幼き時より父母の、 結び玉ひし彼の君と、 妹と呼ばれつせとよびて、 くらさん時の來りなば、
嬉しき事にあらなんと、 花の朝や月の夕、 かなしき時によるこびに、 夢にうつゝにたのしみ
て、 まちにし程にいつしかと、 君は二十歳を三つこえて、 吾は二十歳の今の春、 千代どち
ぎりし喜びも、 あはれ憂世は邯鄲の、 夢の中なる夢なれや、 ちぎる一と夜の其朝、 無常の
風にさそはれて、 俄に君はゆきましぬ、 かへらぬ旅に行きましぬ、 狂ふ計りや吾心、 餘り

の事に驚きつ、 夢に夢みしこゝちして、 泣くより外にせんぞなし、 只一と夜さのちぎりにも、
君のなさを宿しけん、 只ならぬ身となりは是、 わまりに事のふしぎさに、 しうどの君やし
うとみの、 君はうたがひ玉ひけり、 仇し男の種ぞとて、 妾は家にかへされぬ、 家にかへれ
ば父母も、 仇し女と吾をしも、 うたがひ給ふかなしさよ、 女は嫁せし其家を、 玉の緒たぬ
ばいざしらず、 出ることやと父はしも、 妾をしかり玉ひけり、 戻ればしうとしうとめの、
仇し女に要やある、 家に入れじどの玉ひぬ、 なきつすかりつたのめども、 行く可き所返るべ
き、 ところもあらずなりにけり、 たのみなき世のさまなれや、 頼みなき世と知りつゝも、
たのめる人の心には、 うらみある世とかこつなり、 仇し女と父母や、 しうどの君や人々の、
うたがひませせよみのよに、 在せる君は妾をば、 知りていませりしりませり、 頼みなき世に
ながらへて、 何をたよりにくらさん、 いでや急がん黄泉の國、 せの君いますよみの國、
許してたべよ父よ母、 うけし惠は海山に、 まさりて高いいや深き、 其万分の一つさへ、 む
くひもなさで先立る、 不孝の罪は許してよ。
ばつと立ちたる水けむり、 折しも月は雲がくれ、 さつと降りくる村雨に、 あたり小暗らくな

りゆきつ、 森のふくろふの聲やみて、 無常を告ぐる山寺の、 鐘もかすかにひびくなり。

故郷

(一) 夏のやすみに来て見れば、
わかふるさとのたのしさよ。

あつしといへどわがやどは、
桐の木立に目を避けて、
たえずかよふや窓の風、
さくもすしき瀧のおと。

天

真。

(二) 月かげしるき夕かほの、
はな咲く棚の下蔭に。

みなうちつとひ、うるはしき
木のみたうへつ、はらからが、
かはるく、にち、は、の、
かたもみまつるうれしさよ。

(三) かくておもひのまゝならば、
幾千代までもつかへまし。

たのしき花の下かげに、
おやはらからのその許に、

まざれるところあるべしや。
黄かねのいへも玉のとも。

和氣洋々、何等の眞摯。

月下吹笛

伊良子暉造。

(一) 袖引きとめて關守が、
とめしつらさをなさげにて、
花にやどかる須磨の里、
今宵は笛にあかさばや。

(二) 蘆分小舟棹とりて、
浪のまに／＼漕ぎくれば、
綱手かけたる海士が軒、
小松がくれに月さしぬ。

(三) しばし岸根に舟とめて、
手折るも一枝吹風に、
散るや木末のひまとめて、
月も洩れくる磯さくら。

(四) 霞にくもるはるの夜は、
須磨も明石も名のみにて、
ほのかに見ゆるいさり火に、
今宵は遠きあは路しま。

(五) 故郷人はうらむども、
一よはゆるせ笛竹の、
天つ御空に通ふらむ、
雲もたゞよふこゝちして。

(六) おぼろに匂ふ夜もすがら、
すみ行くものは調にて、
あはすもゆかしおのづから、
波のつゞみに松の琴。

勿來の關

(一) 利根の松原一夜ねて、
駒もいなゝくいな原、
葉山しげ山ほのかにも、
知らぬ筑波も見なの川。

(三) 霞の浦のうらくと、
浪もしつけき鹿島瀨。
ぬれ行くほそに日も暮れて、
勿來の關のゆふまぐれ。

(三) 花の木かげに駒どめて、
はらふもしばし袖の雪。
うたひいでたる武夫が、

(四) 春もくれ行く東路の、
誰が關守のゆるしけむ。
風を勿來とおもひしに、

三十一文字のやまと歌。

みちも狭に散るやまざくら。

(五) ほこを枕にうたひけむ、
もろこし人も思はれて、
君がこゝろのゆかしさは、
千代のあとまで匂ひけり。

(六) たが薄墨のなごりかも、
寫しとめたるこのかたよ。
かきこ流し、水莖も、
ふりし昔をしのぶ草。

此精彩は君ならずして誰にか求めむ。

幽 靈

また墨いろもあたらしき、
風にまたゝくみあかしの、
ひぎに眠れるをさな兒を、
あるひはたかくまた低く、

位牌かすめて立ちのぼる、
影にはどけのみすがたも、

幽 花。

袖におほひて珠數くりて、
聲のふるひてそらはぬは、

香のけむりもあはれにて、
いとたふとくぞ拜まるゝ。
經よむさまもたふとしや。
をりふし涙やぬぐふらむ。

リンの響きにをさな兒は、	夢やさめけむ身をおこし、	アレ母さまやは、
何處へゆきます坊すて、	ヤヨ母さまよは、	坊をもつれていてたまへ。
ゆめかうつゝか母よびて、	叫びくるへるをさな兒を、	ひざにいだきつ父おやは、
なみだぬぐひし其手もて、	みどりの髪をなでながら、	何をか叫ぶこや坊よ。
汝が母さまはは、	いまは此世にあらずして、	光りかゝやくの、
なりぬとすとす言の葉を、	聞きつゝまたも眠りけり、	こゝろなげにも幼兒は。
すやくゝ眠るをさな兒の、	顔をまもれるて、	まみには情のいろふかく、
たえずなみだの涌出で、	流れ落つるをせかむとや、	まぶたを閉てうなたれぬ。
なみだにうるむ目を開き、	すゑしひとみも物すこく、	ヤヨわが妻よいかにして、
たちかへりしぞあな嬉し、	あな戀しやと手をあげて、	招くさまこそあはれなれ。

よくぞかへりし我つまや、
 盡ぬえにしのためとやと、
 妻のすがたはかきさえて、
 又なきいづるをさな兒に、
作者懐儻ならんとを欲せしに似たれど、語調冗漫の痕ありて、凄怨筆に迫らざるを惜む、又命題は少し露骨ならずや。

秋夜里川
 小 萩

昨日かかへる夕潮に、
 洗ひし夏も流れさり、
 今日たよする浪つゝみ、
 秋のしらべとなりそ
 めぬ。
 みぎはの櫻もみぢして、
 逝く水をむる影すくひ、
 うちびるそゝ岸の上、
 ぬらす袂
 のつゆあかし。
 日も入相の鐘の音、
 消ゆるまにゝさ夜こめて、
 こがね浮き散るさ波に、
 ひれふる魚の三つふたつ。
 待てるわが妻よそにして、
 すなせりいそぐあまやたれ、
 ひど筋ほ
 そき漁り火の、
 亂るゝ見るこそあはれなれ。
 柳のもとのわたし場に、
 世の秋風はかよへども、
 ひなしき舟をまもりつゝ、
 琵琶ひく君の影もなし。
 みかへる雲のはてとほく、
 ふるさと忍ぶ
 旅びとは、
 舟うつ浪にいかばかり、
 心ばそさのよせくらん。
 流れおとして逆かのぼる、
 筏も
 とほくなりゆけば、
 うかぶはうすき星の影、
 わたるは秋の風ばなり、
 こゝぞわが世とたゝす

めば、向ひ山なるたかどの、おばしまあたり少女子が、誰れ待つ宵か笛の聲。
叙景の筆の精妙華麗なるは、蓋し小萩君獨得の長所。

處女心

門田擬叟。

見みえむすべのかたければ、あだにやつる玉の緒や、世にはかなきは我身にて、うらやま
しきはかの小鳥。床しき庭の奥ふかく、戀しき君のかたはらに、たれは、からず飛び行きて、
心のまゝにうたひつゝ。

めでたき鳥よあけくれに、ともあき我をなぐさめてと、優しき手もてなが脊をば、撫でつゝ、
君ののたまへば、よしや喉のやぶるとも、涙の聲をはりあげて、つもりつもりし恨をば、
我に代りてうたへかし。

婉約、尤も戀歌の體を得たり。

みたれ咲

枯

柳。

心の塵

うつはり多き夢の世に、
神をうらまむそのひまに、

神のたすけをいかで得む、
心のけがれぬぐひされ。

嵐

(一) ふしなびく尾花が末に月おちて、

(二) 霜置く小野に賤がやの、

高ねに雲のかゝれるは、

もるゝ光のはの見える、

又もこよひもしぐるらし。

わはれ砧のこゑすなり。

(三) 谷間をいでしいさゝ川、

(四) 別れしをりの言の葉を、

野中をわけて賤がやの、

まさかへしてはくりかへし、

垣根をゆるくめぐるあり。

又も衣を打ちそめぬ。

(五) つもる思にみだれては、

(六) 吹き入る風にねざめしか、

上ぐる手さきもよわりきて、

母のこゝろも知らずして、

(七) 千々の思におもはずも、

うつ手をしばしとむれば、

我を呼ばふかちこの聲。

今一步にして圓熱の域に到らむ、勵精する所あれ。

なみだにぬれしきぬさむし。

ねやになき立つちこのこゑ。

山寺

信濃、甲

城。

日はくれて、人里遠し、ゆきてたづねん。

木の間より、ともし火見ゆる、

うす白く、咲けるは何ぞ、

萩の花、袖やぬらさむ、

若ふかき、いしのみ佛、

くさむらに、たふれしまゝぞ。

枯尾花、まねくと見れば、

新墓に、なびく破れはた、

あなわはれ、いかなる人か、

ち、は、を、すてにし人か、

いとし子を、のこし、人か、

さてはまた、二世のつまをか、

雲間もる、月に見やれば、
撞木には、かつらまつはる、
經をよむ、聲のまじるは、

瓦おち、柱かたぶく、
つまこふる、鹿のなく音に、
さては未だ、人も住めるか。

幽寂蒼涼、詩品亦高し。

八重の浪(友の南洋に行く
を送りての作)

山口、與謝野修。

(一) 千里吹く、

(二) さらばらに、

沖つ汐風に、真帆あげて、

行く旅ならず、事成らば、

益荒猛男の、わが友は、

御國の榮え、身の譽、

南の洋の、鰐のすむ、

勤とくたて、かへりこよ、

マニラを掛けて、出で、行く。

豊酒かみて、われまたむ。

(三) こゝちよの、

(四) ひとこゑの、

君が旅路や、おもしろの、

笛の響を、名残にて、

けふの別れや、船の上に、

船は出でけり、友いづこ、

巾ぬすうちふりて、
 友のこゝろや、
 人を送るの詩は六つかしきものか。

かへりみる、
 いかならむ。
 その船いづこ、
 見ゆるかぎりは、
 かげきえて、
 八重の浪。

うば櫻

間瀬安一。

いふかしみ
 まわらぬ舌に、
 わのやまこえて、
 なつかしき

かたるらく、
 わがうばは、
 いくたびか、
 そのうたの、

よへのあらしの、
 うづこの里へ、
 やすきねむりに、
 いま一たびを、

さむけさに、
 ゆきにけむ。
 いらにしを、
 さかしてよ。

うばにきかせし箏の笛、
 やさしきおとのするなるは、

いまでも昨日にかはらぬを、
ながむるかほの罪をさよ。

は、さまうばはいかにせし、

わはれわが子よながうばは、
おちゆく月どもももに。

わのやまこえていりにけり、

さそふ嵐の風をいたみ、
つばみの花をのこしつゝ、

なみまにはふうばさくら、
ちりゆくさきや何處なる覽。

先づ一箇の可憐なる詩なり。

白骨

西瀧、文廼舍秋雨。

秋更けて千草にすなく、
おく霜にさやく野すすき、

虫の音もいとしはがれて、
霜置きて剣にまがふ。

生ひ茂げる草間の中に、
青びたる苔の衣に、

傾ける石碑建てり、
幾年の嵐や経たる。

雲間より光もらしぬ、
すかし見る卒塔婆の影に、
何人のなれの末かも、
亂れにし修羅の巷に、

八日月いともものすこく、
白栲の鬮體一つ、
哀れ哀れ守る人もなし、
朝露と消ぬし餘波か。

かぐはしき花の姿も、
女郎花いましめがほに、

東のまにうつろひゆかん、
立てりけり鬮體のもとに。

蒼涼悽惻。

今日の日

坂内無腸子。

わかねさす、

けふのみひかり、
こゝろくたきて、

かゝやきぬ、
すこさなむ。

わたなすこしそ、
やよひとよ、

のどかなる、

けふのひかりや、
きたりしきはみ、

かゝやきぬ、
わらなくに。

いつこいつちゆ、
きたりけむ、

ぬばたまの、

よるのきはにぞ、
にしのはやしを、

みひかりは、
いろどりて。

いりにしはても、
きはみなし、

あやめもわかぬ、
みるとしもなく、

やみじより、
またもはや、

うまれしひかり、
かへらぬやみに、
いやはやく、
かくれけり。

わいらまた、

けふのみひかり、

かゝやきぬ、

あだなすごしと、

やよひとよ、

こゝろくだきて、

すごさなむ。

幹旋自由、筆勢滑達、宛然西詩の如し。

たが寫眞

ちらと見とめしわの寫眞、
綾の袂の底ふかく、

菰

堂。

あまる思ひ

千々の思ひをそこはかと、
長さ紙さへつきはて、

書きもて行ばいつしかに、
あまる思ひをいかにせむ。

濱邊の夕暮

茜色なす鳥のまへ、

京都中學、

み

よ

し

の。

走る白帆の影清き、

波路はるけき海原に、

明日を契りて日はくれぬ。

二つ三つ四つ後や先、

歸り來りぬ蜃小舟、

互にむつむ同胞は、

今日の獲物を語りつゝ。

雪をわざむく白妙の、

真砂をふみて己がじ、

あかゝね色のあざりさら、

籠たづさへて歸りゆく。

袖吹く風にさそはれて、

たつや漣磯あらふ、

聲はのどかに露やどる、

みどりの松と色競ふ。

蜃の藁家に煙たち、

ゆきゝの人の跡絶えて、

ぬぐへる如き大空に、

まばらに星はかゝやけり。

くろみ渡れる海の面、
いざよふ月は花やかに、

黄金のなみを浮べつゝ、
鎮守の森を出で初めぬ。

ふし面白きふなうたの、
浪にたゆたふ篝火の、

聲きこゆれど舟見えず、
高くわがりつまた低く。

海邊の夕景、描し得て清淡。

厭世詩人

(透谷と湖泊堂
を想ひて)

三 千 童 子。

神の御國にいそがむと、
真如の月のかげ澄みて、

濁り行く世を離れ来て、
誘ふもうれし西のそら。

まばしはむすぶ谷の水。

昔はうたも詠みつるを、
末のながれの末かけて、

今日は別れと成にけり。
清きこゝろを忘るなよ。

たにの小川よいつ迄も、

積れる塵をかぞへつゝ、
何をたのみに存在へむ。

とみと位にあてがれて、
貴きひとまづしきも、

露よりもろき世の中の、
末はかはらぬ土なるを。

神の御國に咲くはなは、
光にさはるくももなし。

うつろひ變る色もなし。
神の御國の行くみづは、

神の御國を照るつきは、
濁りに染まる波もあし。

いざやぬがまし塵の衣、
わが歌を聞く者としては、

げにうつ蟬の夢の世に、
神より外になかるらむ。

容れられぬ社嬉しけれ。

心のくもも晴れぬれば、
暗き冥路もたどらなむ、

こゝろの月も照すなり。
神の御國に行くまでは。

命題既に高遠、姿致又幽玄、作者の觀念を想見するに足る。

冬は來ぬ

信濃波多、碧 水 生。

軒端の雀はいひけらく、影うらゝけき夏の日、たのしく友どうちつれて、唱ひかはせしま
 とひなる、木草の緑もいろさめぬ。まぐや霜夜のさびしきに、落葉の雨も降りそめつ。あ
 はれいづこに唱ひなむ、かれ野に落穂は多けれど、すさむあらしの寒くして。小川の水はさ
 ゝやきぬ。織るかど見えし青柳の、糸の緑も野の草も、うたてや今はかれにけり。ゆくてか
 さりて影うけし、花の色香もうつろひぬ。かゝやく日さへ影うすく、月の光を身にはしむ。
 とぎす氷にさゆる風、流れゆくゑはいづれぞや。野邊の木草はかこちにき。すぎにし夏のあ
 つき日は、すゞしの園よとたゝへつゝ、里のうなむはつとひきぬ。柴かる翁も山賤も、つ
 れなきしぐれふりそめて、ちらすや風のこの日ころ、やすますなりぬ村人も、いこはずあり
 ぬ旅人も、露霜しげく月冴えて、あはれや冬も音づれつ。

結構聊々蓄體を脱化せり、唯想の之に伴はざるを惜む。

蟲の音を聞きて

平井一枝

露重し野分のあした、わが宿のまがきの小萩、たわゝある枝やをれなむ、うち見やり心うけ
 れば、おこさんと寄りそふ陰に、きりくす今ぞ鳴くなる、手をふれて下枝を取らば、つ

ひに鳴く音をや止めん、白露のちりも落ちなば、おどろきて得こそあかめや、心なく枝や折
 れなむ、あかすきく聲やたえなむ、村きものこゝろたゆたひ、行きつ戻りつ。

詩も亦萩の小枝のをしくくれりたるが如し。(音嵐)

くすしの家

細田霜雁

くすしの家の一室には、いづれ幸なき人々の、おのゝなやむいたづきを、いやさんため
 につとひ來ぬ。をりからひとりは親の、をさなき乳子を背に負ひて、あはたゞしげにかけ
 いらぬ、おとなふこゑもふるへつゝ。くすしはいそぎいで來たり、をろせし稚子をよく見れ
 ば、こはそもいかに事されて、哀れむくろとなりにけり。臨終に受けし苦痛は、瘦せし面
 わに残りつゝ、ひらきしままの眼には、おのが魂をば見送るか。はゝなる人のいひけらく、
 しばしさまで己が背に、くるしみさげぶこゑせしが、思へばそれを名どりある。かくなる
 ことゝさきつより、思はなくにはあらねども、くるまにのらん代もなく、かひなき身ゆゑい
 とし兒を。あどはいひえずなき伏して、もろ手に稚子をださしめぬ、きゝぬし人は我袖を、
 よその哀に絞るらむ。

斯る材料に詞藻の資きは是非なきこと。

郷先生

伏

龍。

ちりしきる紅葉をわけて、
一むらの家居あらびて、

片山のはとりいゆけば、
しかの聲まぢかく聞ゆ。

誰れをかも送るなるらん、
老はしも稚子をせ負ひて、

里人は若きをいはず、
道の邊に柩をまもる。

涙をば絞りかはして、
老人のすゝりて泣けば、

わりし世を語りかはしつ、
うなる等も目をしはだしく。

老僧の讀經のこゑに、
野寺には鐘もひいけど、

夕がらす枯枝になきて、
里人は去らんともせず。

そこに立つ一人の翁、
つゆおもき襟を正しつ、

こととひし我に答へて、
まごゝろに語りいでけり。

『この里の父とも仰ぎ、
人の身も秋かせ吹けば、

ひじりともたへまつりし、
只もろき木のはなりけり、

幾年のむかしなりけん、
我が里の學のにはに、

老の身のまさでに知らず、
年わかき君はきたりぬ。

よのつねの若きにも似ず、
にこやかに導きませば、

誠心に子らをいとしみ、
春かせはさとにみちけり。

師の君と子等のしたひて、
うまし子ときみはむつびて、

宿がりをつねおとなへば、
よの道をいつもさとしぬ。

雪の日に傘さしかゝげ、
師のきみを森の小道に、

泣くちごをせおひ玉ひし、
いく度か我もみたりき。

この里に妻も求めて、
人々のこふに任かせて、

末長く家居しませと、
さゝやけき庵もあみつ。

師の君としたひし子等も、
わたらしき稚子を集めて、

人親と長けてかはれば、
つぎづくに君は教へぬ。

つぎづくに教へたまひて、
里人は父と仰ぎて、

つぎづぎに年のうつれば、
誰もみな赤子と思ふなり。

教へ子をたからとなせば、

世の中の富はおもはず、

學びやを我が家と住めば、

草の床何をねがはむ。

あたゝかき山家の風に、
うぶすなの御前のはに、

八十とせのはるも迎へて、
いはひせし事は昨日か。

秋かせは老木に立ちて、
そでの露なにの涙ぞ、

旅人よ「人はちりけり」、
さとの雨けふは寂び行く。

しかはわれ未だ年わかき、
父きみにさながら通ふ、

師の君はのこりますなり、
おもざしの底もゆかしや。

きけや人をしへの子等は、
世になほき道のはる風、

よき父を猶もあはげり、
このさとにみつが嬉しさ、

語りつゝ、あたりをみれば、
闇ふかきみはかのあたり、

いつしかに人はかへりて、
松が枝にかせもさゝやく。

みわたせば三日月おちて、

はらはらと紅葉又ちる、

ともし火はさとわこさえて、

鹿の聲又もまぢかし。

郷先生の面目、描し出して紙面に躍如たり。

月の鏡

和郷生。

空ふく風にはらはれて、

雲のちりさへきえにけり、

天つ御神のかけませる、

月のかゝみを君も見よ。

御空くまなく照りわたる、

影にうつれる君とわが、

清きこゝろを神もまた、

見をなはすらむわが友よ。

月の鏡はくもるとも、
ふたりの胸に輝ける、

ふみゆく道はまよはじな、
神の御光しるべにて。

茅渚海

蕁菴。

白き真砂の末遠く、
渚をわらふ小波は、

松の緑りにいろどりて、
鼓をうつにさもにたり。

汀の鼓松のこと、

調べかなつるぬしは誰、

治まる御代の長閑さを、

千代万代とうたふらむ。

白帆をこめて朝夕に、

瑠璃のすがたを海原の、

鏡に映す淡路島、

須磨に通ふやむら千鳥。

明石の瀬戸に茜さす、

夕日は落ちてくれなゐに、

いろどる雲のたなびけば、

瑪瑙の棧こそかゝるなれ。

筆致巧妙を極むと雖も、未だ以て茅渚海の全景を描けり。爲す能はず、須磨浦眺望をすれば可なり。

我おもひ

福岡、灘

川。

思ひ回せば去年なりき、

涼しき夏の夕月夜、

はからず逢ひし其時に

相見し妹が面影は、

今も眼にのこるなり。

いとも優しくうるはしき、

妹が容姿は我こゝろ、

動かしぬれどさらぬだに、

すみなをのこのまじはりは、

いとさよろかにせまほしと、

語りしいもが言の葉は、

今なほ心にさざまれぬ。

妹春のちぎりむすばねを、

清けき愛のまじはりに、

世の憂き事も忘らへて、

心かためし妹とわが、

愛のむつみもあだなりき。

あきあじきの世のさまや、

義理てふ事のなかりせば、

つらき別れもすまじきに、

さばれいましが爲なれば、

かこたんよしもなかりけり。

さはさりながら妹よなほ、

如何に月日を送るらむ、

風の便りにさかまほし。

我はさびしき秋の夜に、

長き夢さへむすばれて、

昔しをしのぶおもひでや、

愛のきづなにはだされて、

夜ごとに妹がひざもとに、

かよひてかたる嬉しさの、

破れなさめなど願ふなり。

有澤橋晚景

富山、堀

重

里。

夕ざれば、

湯浴ををへて身も軽き、

蟬の羽衣身にまどひ、

團扇手にしつ花影に、

眠れる胡蝶を追ふなり。

追ふまゝに、

飛び行く胡蝶にあくがれて、

有澤橋に来て見れば、

川添ひ柳なよなよと、
おはしまに、

流るゝ水も静なり。

より添ひながら眺むれば、
聲もあはれに叫びつゝ、

やもめ鴉も寝ぐらにと、
鶉坂の森に急ぐなり。

夕立も、

晴れて涼しく虹立つに、

黛なせる吳服山、

何を怨みにあかねさす、

夕日影をば隠すらむ。

風ふけば、

礎立つと見ゆるなる、

早苗の緑りそよぐ間を、

月うつる、

足もと近きいさゝ川、

何をかこつか月影も、

折しもあれ、

ふし面白く賤の女が、

沈むと見れば浮ぶなり。

高くならせる楫の音に、

船うた妙に合せつゝ、

早瀬を下る筏舟、

月影のせて返るなり。

かなたより、

棚引く烟は蚊遣火が、

色も涼しきたをやめの、

眉にも似たる月影を、

蔽ひ曇らす詫しさよ。

わけて出し、

三日の月影早や落ちて、

飛び交ふ螢見えそめぬ、

團扇かざして打つまゝに、

流れて落つる星一つ。

あつはらぬ、

歸らむ物と橋板を、

とどろくと踏み鳴らし、

行手の風の涼しさに、

扇忘れし可笑しさよ。

誦し來りて橋畔涼風に佇立するの思ひあり、何等精緻の筆。

豆うる乙女

長野、更 月 生。

豆をめしませ枝豆と、
 年は若き賤の女が、
 呼はり來ぬ日はなかりけり、
 霜の夕も風の夜も、
 月いと白く冴え渡り、
 梢を拂ふ風つよく、
 變らぬ乙女は來りけり、
 悲しき聲をはり上げて、
 行きつ戻りつ幾度か、
 呼ばへど問へどあな哀れ、
 今宵に限り如何なれば、
 乙女の聲はうるみつゝ、
 聞きしかあるは聞かざるか、
 呼びつゝ行けど答ふるは、
 わたりさびしく聞ゆのみ。
 寒さは常にいや増せど、
 豆をめしませ豆めせど、
 誰がいつき子にあるならむ。

月を眺めて賤の女が、
 一人道邊に佇めり、
 つく息さへも悲しげに、
 今宵に限り如何なれば、
 此儘家に歸りなば、
 母の藥を如何にせむ。
 眼は露にうるほひて、
 豆買ふ人のなかるらむ、

材を卑近に取るに甚だ可なり、唯須らく詩想の蓋高なるを要す。

我が妹

奥原幽芳。

尾花が袖はうらかれて、
 つゝれさせとて鳴蟲の、
 こゝらの秋もくれそめて、
 ちりて碎くる白玉は、
 秋としへばさらたに、
 はしき妹をし止めおきて、
 夜なく忍ぶ小夜ふすま、
 枕も浮かぶねやのうち、
 ひまもる風の身にしみて、
 招くすゝきはちからなく、
 あはれも深き庭のおも。
 吹きすさぶなる夕風に、
 誰がおもひ出の涙をも。
 物のあはれはますてふを、
 迷ひ出でにしたびの空。
 かたしく袖はそはぬれて、
 千々にこゝろも亂れつゝ。
 いねぬ今宵も更けぬらむ、

垣根にちかくさをしかの、

つま戀ふ聲もあはれなり。

無難の作。

漁人

紫

水。

日は落ちて、影はみどりに、霧たちて、磯山しろし、釣とめむ、
 名残おしくも、岸のうへ、妻やまたむに、このえもの、見せて笑顔を、
 哀れわが、妻はいづこぞ。

草枕

後

凋。

秋の日足のみじかくて、片山里にゆき暮し、入相告ぐる山寺の、
 哀れいやます鐘のねに、宿尋ねんと奥ふかく、ふみまよひけり深山路に。
 細道づたひ草分けて、露に裳裾をぬらしつゝ、つゝら折なすきこり道、
 熊笹しげき谷の隈、辿りたゞれど山かづの、わやしき軒もなかりけり。

進む道邊に立列ぶ、並木の影のいとくらく、隙まもれくる秋の夜の、
 青く冴けき月影に、しばしをやみもなく虫は、聽て往ぬ身をかこつらむ。

道はいよ／＼せせりつゝ、足のつかれに堪へかねて、あはれ暫時の宿りにと、
 立ちよる松の下陰に、山風そよと吹き添ふて、落つる雫の數しげし。

夜は更け渡り月冴えて、霜夜につまこふ鹿の音も、高根風のがらしに、
 とだへてさむし谷の曲、落葉がくれに糺の、流るゝ音のきこえつゝ。

木の間を吹きて夜嵐の、さそふ枯葉に一ト雫、落ちくるつゆに驚きて、
 仰ぐみ空にあな哀れ、風にせかれて黒雲は、かゝやく光かくしけり。

冴ゆる月影ありてさへ、ふみ迷ひたるこの山路、黒白も別かぬ闇空に、

たどらむ術もつきはて、
もどるにならず亦行けず、
虫のなくねも今は絶え、
戻るも行くもまゝならず、
果は雨さへ降り出し、
反響にひしく足音や、
萩の下葉をうつ音に、
松ふく風の聲すごし。

虫の鳴く音もたえはて、
神も哀れとおぼしてや、
行くては闇にふさがりぬ、
ほのかに見ゆる燈火は、
迷ふ木の間のかなたより、
我をたすくる里人か。

行き暮れて旅魂今夜誰家にか落ちん、あはれにも細くよみ出られたり。

貧女

島根、日野次郎。

壁もわらはに破れはてつ、
いちらしや。年は十まり五つ六つ、
らす哀れさよ。縫ふは黄金の花かざる、
凋み果てなむ春知らで。

可憐々々。

冬休みに友を送る

宮城、松華。

又も遇ひ見ん床しの友よ、
てかたならなむ。吹く笛は別れのしるし、
打ふるふ帽もはるかに。

たいひとり家路につけば、
かり。

門の青柳

西女佳人。

柴のかきねもうちくづれ、
見るかげもなき草の舍の、
長き條をばかはしつゝ、

なびきく〜てまねぐなり、

やがてきまさむ主人をば。

新に來つるあるじしも、
招くなりけり青やなぎ、

いとふ心かなほもまた、
いづこの誰を戀ふるらむ。

措辭淡雅にして趣味深遠。

心の闇

堀井長眠。

世をはかをなみかてばや、 つれさせてふむしのねも、 いやに悲しくおもほえて、 みだる、
胸のおもひぐさ、 かりてはらはんすべなさに、 われからわれを怨みつゝ、 よすがらおもひわ
びぬれば、 しぐれのあめにあらねども、 いやに落ち来る涙には、 ぬれにぬれつゝ手枕の、
かわくひまなきわびしさを、 しのびてすこす悲しさに、 つれなき人を怨めばや、 結ぶかりね
の夢にだに、 姿のしるくみえそめて、 消えんとなせし胸の火の、 再びもゆるくるしさを、 は
らさんすべもあらぬなり。

あはれ思ひに沈む身を、 するやしらすやよそにだに、 しれなんものを隙もるゝ、 月のひかり
のうらめしさ、 わびしき露の床のへを、 しらす顔にもてらしつゝ、 いやにわがみを苦しむる
罪こそ深けれ君はしも、 おのが思ひの種となり、 くしくあやしくまつはりて、 闇よりやみに
まよはする、 つれなき人のうらめしや。

今は思ひにたへかねて、 にはものあたりさまよへば、 月はいよ〜さえわたり、 桂のかげの
いとさよく、 水にうかびて見ゆれども、 めでんとだにもおもほえず。 折りしもあはれ虫の音
に、 妙なるしらべあはせつゝ、 まがきのそとよりもれくるは、 こゝろひかるゝ想夫の戀、
ゆかしき人のすさびかと、 思へば胸もゆらぎつゝ、 われからわれに追はれつゝ、 まがきのも
とをとめぐれば、 いつしかむしの音もたえて、 すみまさりゆく琴の音。

あはれへだての垣一重、 こえなんことのやすけれど、 さすがにそれと耻らひて、 われにもあ
らすたゝすめば、 月はいよ〜さえゆきて、 さとれとばかり虫の音も、 再びしげくなるなべ
に、 かすかになりぬ琴の音も。

まよひの夢のさめくれば、立ちまふくもはれのきて、思ひにもゆる胸の火も、消えてこゝろのすいしさよ。

筆の健なるにもかゝらず、終始一貫の意象なきは惜む可し。

雁の一つら

京都、一櫻堂主人。

月前 琴聲

あたりしづかに、 さよふけて、 月にすみゆく、 つま琴は、
たがしらべにや、 ありぬらむ、 あさちか庭に、 こむ人を、
まつ虫のねに、 あはせつゝ。

雁始來

なれぬ都の、 あきのそら、 夕霧ふかく、 わけ入りて、
問ふよしもなき、 かりの聲、 たが玉章や、 かけて來し、
わがふるさとも、 北なるを。

こよひの月

月の鏡は、 まどかにて、 こよひさやかに、 てらすなり、
ふるさと遠く、 いでたちて、 いくさの庭に、 おきふせる、
ますらたけをは、 いさましく、 はこを横たへ、 つゝたてゝ、
くもらぬかげに、 いくたびか、 つきぬ思ひを、 うつすらむ。

わはれますらを、 山ゆかば、 草むすかばね、 海ゆかば、
水つくかばねと、 ことたてゝ、 國と君とに、 つくしつる、
そのいさをしは、 よろづ世に、 こよひの月ぞ、 照らさなむ、
天つちどもに、 くまもあく。

紅葉

にしきの衣たつ田姫、 にかき谷まにそめいでゝ、
名さへ高雄の紅葉の、 千しほをうつす水のいろ。

温雅と流麗の外には取るべき所なし。

萩ふく風

越中、竹、内、水、彩。

夜やふけぬらん、月さへも、かたぶきそめぬ、西の空、むしの聲さへ、たえくくに、
ふけゆくものを、彼のきみは、いとしき君は、なにゆゑに、きまざるらん、こよひし
も、もしきまざるは、はたとせや、三とせのはどは、あふことの、かなはぬものを、
何ゆゑに、きまざるらん、かのきみは。

つぶやきながら、つまことを、またとりいで、かなづれば、しらべをあはす、まつむ
しの、こゑさへいと、あはれなり。

折りしもわれや、柴の戸を、叩くは誰ぞ、うれしやな、うれしとささる、こゝろをば、
おしづめつゝ、立ちいでぬ。

かみも少しく、くしけづり、衣もすこしく、つくろひて、あらぬるくばを、作りつゝ、
門をあくれば、はづかしや、あなはづかしや、くやしきも、いとしききみは、いつこにか、

かげさへあらで、萩のはに、そよぐ風のみ、聞ゆなり。

縦ひ趣向のありふれたるにせよ、口調の流滑なる凡手の及ばざる所あり。

此の世

枕、肱、子。

(一) 天の星よ地の神よ

心あらば聞け、吾言はん。

玉のうてなに酒くみて、

花のあしたも月の夜も、

くはし女にかしつかれ、

あはれ此世をやすくゝと、

送れる者も人の子か。

(三) 天の星よ、地の神よ、

心あらば答へよ、吾問はん。

浮世とは誰か名つけし、

(二) 天の星よ地の神よ

心あらば聞け、吾言はん。

伏屋の煙り絶えがてに、

風のあしたも霜の夜も、

饑に泣く子に絶られつゝ、

あはれ此世をくるしみて、

送れる者も人の子か。

流れてはやさあすか河、
 淵瀬のかはる昨日今日、
 富みたる人も貧しさも、
 わはれ一夜の夢のあと、
 消えて果敢なきものなるか。

見かへれば天地眠りぬ、
 そらある星も地の神も。
痛切の餘り、筆を呵して立ちどころになりしもの。

水車

相模、瀬戸重次郎。

里の小川の水清み、
 昨日も今日も一昨日も、
 少女はふくろ背負ひつゝ、

たえず廻るや水ぐるま、
 音おやみなく聞えつゝ、
 朝なくくに来るなり、

おうなは米をになひつゝ、

夕の風にかへるなり。

流るゝ水はかはらねど、
 わはれ少女は年老いぬ、

廻る車は變らねど、
 わはれおうなは今いづこ。

さはれいく年へし後は、
 車も朽つる時あるを、

小川の水の涸れはてい、
 いかで知る由あるべしや。

觀察は面白きも餘り率直に傾けり、今少し婉曲にあらまほしかりき。

わかれ

仙臺、鈍

太。

千代の松原千代かけて、
 契りし甲斐も嵐吹く、
 唐野に向ふ君あれば、
 またあふをりはいつの世
 ぞ、
 國と君とのみ爲めには、
 命を捨つる武夫と、
 兼て覺悟は定めしも、
 今や別となりぬれば、
 とやせんかくと胸の中、
 亂れてしげさわが涙、
 あはれいく度しぼるとも、
 名残はいかで盡さぬ
 ぐさ、
 さあ〜ちんばちんばとて、
 門べを出づるおも影も、
 いつしか消えて有明の、
 月のみ

袖に宿るなり。

なき妹

斐太 伯水 漁夫。

朝な夕な、そこの軒に、うちつとひ、たのしくあそぶ、うなひらの、つみあきすがた、みるたびに、いにし吾いも、今もなほ、この世にあらば、いかばかり、やさしきすがた、まさるらむ、あはれうき世は、まゝならず、かくと思へば、たちまちに、むねはくもりて、うちあけき、かなしさをさる、この夕べ、いつしかふけて、秋のよの、月にそのふを見渡せば、そよふく風に、はかなくも、かきはのま萩、あとなくちりぬ。

漁夫

大分 K U。

吹き巻く風つよしとて、磯打つ波のはげしとて、舟のゆるぎのいみじとて、かちとることのえせじとて、すなどりせずは今日明日の、餉のしるをいかにせむ、つま子と共に打ち萎れ、煩らふ様ぞあはれなる、年頃なれし我がかひな、日頃きたひし我が體、いかでかおぢむ此の波を、如何で恐れむ此の荒を。

かへりおとしと妻も子も、遠き沖をぞ眺めける、折しも見ゆる白帆影、あれぞたしかにたがひなき、獲物如何にと子は親に、母諸共にたづぬれば、はくと打ち笑むかなたより、こなたの喜び如何ならむ。

籠背負ひつゝ子は先に、妻は夫と語りつゝ、我が家をさして歸り行く、親子三人のうれしさは、語らむ言のあるべしや、うつさむ筆のあるべしや、あはれ百千のくるしみに、代へてとりし此の魚を、都にありて心なく、味はふ人ぞうらめしき。

漁夫は尤も詩題に入り易きもの、而かも多く奇警の作を見ず、是れ想のまさつく所、一律なれば也。

別後戀

和多野 姑洗。

千もどの柳手折りつゝ、目元うるみて行くわれを、送り給ひしみ姿の、朝な夕なにしのばれて、人こそしらぬわが袖は、潮干に見えぬ沖の石、かはく間もなきこの戀は、行末如何になるやらん。

幼なじみ

近 森 香 村。

(一) 草をしどねに夜をいねて、

(三) 春の山路をもろどもに、

今日ふる里に歸りしが、

若菜つみつゝたはぶれし、

うぶすな神のみ祭に、

春枝の君や如何にせし、

親しき家によばれぬ。

そゝろ昔のしのばるゝ。

(二) 開くふすまのその音に、

(四) やがて出来ぬ彼の君は、

いとなつかしく見返れば、

何にたぐへん其姿、

そが母人かあなをかし、

高峰に光る夕月も、

はや我胸はどゝろきて。

恥ぢて雲間に入りやせむ。

(五) 『忘れませしか此の君を』と、

(六) 十年見ぬ間にらうたげて、

あるじは後に見返れば、

いと麗はしくなりぬれど、

薄くれなるに頬そめて、

わづかに残る面影は、

言葉すくなにぬかづきぬ。

君がほゝ笑む口もとよ。

(七) 月のおもわの松が枝に、

かゝる姿をみてあれば、

持つ盃にかけ落ちて、

少女は置きぬ我前に。

眞摯、敢て粉飾を用ゐざる所、却て一段の情味を添ふ。

鳴の羽がさ

吉 野 甫。

背戸の流

いつはあれども殊更に、
岩にせかれてすみまざる、
たえてはしきりしきりては、
枕にひやくゆかしさよ、
おのづからなる琴の音。

風静かなる夕つく夜、
背戸の流の水の音、
またたゆみつゝおもしろく、
これを琴なきあばらやの、

老 樵 夫

かくも浮世に長らへて、
 秋のあはれを身にしめて、
 有明月の影きえて、
 森より林とざしつゝ、
 いづらゆかむも霧深み、
 雫にぬれて迷ひゆく、
 いつしか朝日かゞやきて、
 迷ひもはれし山みちにて、

嘆きのみこる老樵夫、
 けさも山路を辿るなり。
 山のはにたつ朝霧は、
 谷より山路埋め來ぬ。
 道なき道をもどめつゝ、
 心の中やいかならむ。
 こめし霧さへ消えうせぬ、
 うたふ樵夫の聲高し。

古戦場

ますらをが、
 玉ちる劍ぬきつれて、
 白く傾く月かげに、

命を露と争ひし、
 鳴のはがきの音さびし。
 わら野の末に霜見えて、

湖中

夕日のひかり、 背にうけて、 湖を漕ぐ、
 身の上と、 なるやらむ、 そのゆくはても、
 たれどもにか、 みづらみの、 流の末に、
 誰が
 浮きつ沈みつ、 ゆくはては、
 世をうみわたる、 はかなさを、
 こと問はむ。

背月の流、湖中の兩篇を以て最す、殊に湖中の結末、何等の妙句。

墓邊の櫻

上毛、 壁 崖。

亡き祖父君のおくつきに、 一本さくら生ひ立てり、
 語るなり。 散りてまた咲くこの花は、 返らぬ御靈守りつゝ、
 後いくとせの春かけて、 夕さびしく匂ふらむ。

田舎工女

戸塚、 酒井 すが子。

雀どもに起き出て、 ひねもす業に追はれつゝ、
 なりけり。 亂れぬ髪を結びかへ、 小袖にさらを着かざりて、
 月ふる間なくいそしむは、 田舎の工女の身
 ゆわみ化粧に日を送る、 都小

女にならねど、あくるくるの別ちなく、手業ひまなき己が身は、破れし衣をまどひつゝ、
 今日よ明日よと送るのみ、かせぎ暇なき身なれども、くるしき中にさまぐの、樂しき事も
 こまれるは、田舎工女が身なりけり。塵にうまれて塵に活き、つれなき夫に身をまかせ、
 墓場の苔と朽つるひと、都にありと聞きぬれど。こひしき君どもも、もにも、笑ひかはして送
 る身は、野山里川かど田さへ、我を羨む心地して。

紅塵千丈の都門に紅粉を粧へる者、これ作花の美なるに異ならず、田舎工女の天真なる、かくもありなむ。此詩辭句の幼きものあれども、態を削らず。

新 嫁

竹 田 翠 陰。

雨は晴れたりいざゝらば、
 男女もうちませて、
 うたへるうちに年はまだ、
 聲もかすかにうたふなり、

早苗とらんと小山田に、
 田植の歌をうたふなり。
 いとうらわかき賤の女が、
 をりく顔を赧めつゝ。

われは問ひけりなればしも、
 今日のかすかにうたふらん、

聲いとよきにいかなれば、
 けふはかすかにうたふらん。

その聲聞くやかれはまた、
 すげの小笠に顔かくし、

いと耻らひてうつむきぬ、
 早苗とる手もわかへけり。

あはれかれこそかの家に、
 妹脊のなかのかたらひの、

よめと呼ばれつうたはれつ、
 まだとし月もたぬなり。

輕妙にして一種の風趣を帯ぶ。

夜の休み

吳 港 紅

雪。

勤めん爲めに神は世に、いこはん時を作りけん、明日の爲めとて今日の夜を、我等に與へ玉
 ひけん、一日のつとめなし終へて、ふしむに入ればいつしかと、ひるのつかれも世のうさも、

わすれはてつゝいとやすく、むすびし夢の通ふらむ、神のまします御國まで。

孤 衾

紅 涙 子。

夜はほの暗く沈みゆき、
低く哀しく身にしてみて、
燈火はそくつき白ろし、
樂しき夢も消え失せぬ。

窓うちならず風のおと、

友なき夜半の聞さむく、
いと麗はしき戀びどの、

更けゆく鐘を數へつゝ、
そのおも影が恐ばるゝ。

心に消えつあらはるゝ、

君がいまし、はる秋は、
二世を契りし嬉しさも、

花のあけぼの月の夜半、
烟と消えしはかなさよ。

語りあひつゝ面白く、

胡蝶のゆめの人の世や、
あれし家居に獨りねの、

げに幻ろしの浮世かな、
ねぞめわびし床の上。

戀しき人にのこされて、

おもひ煩ふふしごとに、

すぎし昔しのしのばれて、

いと悲なりやまなり、

涙の川のせきあへず、

かわくひまなし袖の露。

千篇一律、吾人は聊も作者の伎倆を認むる能はず。

月下聽琴

小 出 清。

黄昏近かく、 たちいでし、 隅田川原を、
さまよへば、 春のすがたは、
あともなく、 長きつゝみに、
人たえぬ、 月の光は、
くまなくて、 つくばねおろし、
吹きすさび、 行雲はらふ。

をりしもあれや、 かなたなる、
ひとむら立の、 木の間より、
もれくるひかり、 もろどもに、
いともたへなる、 ひとふしは、
たが世をしのぶ、 妻琴か、
あまつ乙女が、 かきならす、
その手すさびか。

四方にきこゆる、 蟲の音の、 梢をつたふ、 風音も、 そのしらべには、 たへざらむ、 月影のみぞ、 さえくして、 いとゞ清けき、 爪音の、 雲井のよそに、 通ふらむ。
措辭豊麗、宜く清賞するに足る。

きぬた

西林 知義

(一) 秋の夜の、 風にさそはれ、 (二) 誰が爲に、 打ちつるものか
我が窓を、 訪れ來たる、 はた又は、 自がなすべき、
小夜きぬた。 すぎはひか。

(三) かんばせを、 風にさらして、
打つ人は、 乙女かうばか、
はた誰れか。

兄上よ

秋 雨

やよ兄上よ見玉ひね、 うしろの岡の菊の花、 いまは盛りとありにけり、 いざ諸共に見にゆか

ん。 やよ兄上よ見玉ひね、 黄菊しら菊こぎませせて、 うるはしくこそ咲きにけれ、 折りて玉はれかざしにも。 やよ兄上よ如何なれば、 かくは香りの芳はしき、 今一と枝を母さまの、 土産にをりてよ兄上よ。

田舎雑詠

東京 斯花 庵

夕ぐれ

田の面に夕かせ戦ぎ、 山の端に夕日を残る、 白露を足もてくだき、 飛ぶ虫を手もて追ひつゝ、 睦しく遊ぶはらから、 折々に小手を翳して、 眺むるか彼方の途を、 呟くか眉をひそめて、 亂れにし髪より高く、 眞柴負ひ草鞋踏みしめ、 かへり來る母の姿に、 走寄りぬ諸手を舉げて、 母上よなご遅かりし、 其柴を我も持たんと、 一把二把肩に擔ひて、 嬉しげに謠ふひな唄、 三日月の光りほのめき、 山々は黒み渡りぬ、 小流のさゝやき低く、 草むらの虫の音高し。

虫の音

都のゆめを結ばんと、 月を蓆にまろび寝の、 枕にちかき虫の音に、 團扇を暫し差しおきぬ。 まだきに秋ぞ通ふなる、 野山の露によもすがら、 たのしく謠ふ汝の身に、 ならば我身もあり

てまし。

彫ざむ我が名

京都、松 蔭 三 栗。

真砂に我が名書きつけて、
千代に八千代に留めんと、
願ひしかひもあら磯に、
寄せくる浪は心なく、
あどなく文字を洗ひけり、
あどなく文字を洗ひけり。

永く残れど我名をば、
立木に彫りておきしかど、
年経て後にきてみれば、
日影ももらぬ其木立、
影だに見えずなりにけり、
影だに見えずなりにけり。

かねより堅き大理石、
これに我名をゑるならば、
千代もくちじと思ひしに、
あはれやなるにくづれつゝ、
あはれや土に埋れけり、
あはれや土に埋れけり。

書けどしるせど消る名を
いかにしなば消ざらむ、
思付きたり良き手だて、
今より後は世の中の、
人の心にゑりおかむ、
人の心にゑりおかむ。

誠の言とわざをもて、
鍛ひ上げたる文字にて、
人の心にゑるならば、
千代も八千も万代も、
みがきしまゝに残るらむ、
磨きしまゝに残るらむ。

如何にも西詩の面影あり、一節毎に結句を重ねしは無用のやうなれど、之を刪り去らば、譯者の本意に背かんかき、其儘になし置きぬ。

常磐雪行

さ、のや。

都ちまたに、
夜は更けて、
清水のあたり、
きらめくは、
誰をまつ宿の、
ともし火か、
身をしる雪の、
ますゝに、
降まさりつゝ、
さえわたる、
空ものすこく、
きこゆるは、
丑みつ時の、
鐘をらし。 たぐふか犬の、
遠吠に、
身の毛もよだつ、
心地して、
杖はえ
つかぬ、
母君も、
まぶかにかぶる、
市女笠、
夜さへにさは、
うつせみの、
人目のせき
を、
よくとにや、
行來どだえし、
さびしさも、
あだもつ身には、
なかゝくに、
幸ある
と思ふらん。 見こしの松の、
たわみつゝ、
枝におどろく、
梟は、
吹雪に夢や、
さま
しけん、
右に左に、
取すがる、
童はあはれ、
兄弟か。
母がいだける、
ふどころの、

兒さへいとゞ、寒けさに、音をば涙に、呑みつべし。よとばかりの、泣顔も、わはれ
 咽の、うちにして。時ならませば、むしぶすま、なこやが下に、高殿の、夢暖に、
 いねましを。はけるは何か、白ゆきに、血しは染なす、くれなるの、花ならなくに、
 六のあし、跡はやがても、消えぬゆり。行方はそれと、わかぬとも、雪をわかりに、
 見おければ、七條あたり、風寒し。

材の陳套なるは云ふ迄もなければ、兎に角讀み了りて、一片の興趣なきにあらず。

あづの思

鶯 谷 子

(一)しづの女の、
 衣手さむく小夜ふけて、
 誰をまつとてたゞひとり、
 伏屋のなかにころもうつ。
 (二)折りしもわたるかり金を、
 彼はいかにかおもひけむ、
 (三)月はくまなくさえわたり、
 虫の草葉にすだくなり、
 折りしもおとなく松風は、
 秋のあはれを添へにけり。
 (四)去年は今宵の此月を、
 むつみかたらひ我せこと、
 (五)秋のあはれやめつるらむ、
 うつ手やたゆくなりにけむ、
 しばしきぬたのとぎるゝと、
 柴のをりとほひらかれぬ。
 (六)たとひ遠くはへだつとも、
 てる月影はへだつまじ、

かりの行方を見つめつゝ、
 はろりとおとす一と雫。
 (七)さぞや今宵の此月も、
 故郷をおもふ種ならむ、
 やよかりがねよ心あらば、
 故郷は無事とつたへてよ。

既にありふれたる趣向なれども、讀んで間然する所なきは、作者亦老手なるかな。

花吹雪

偶 吟

ゆ き 子

仰げばたかしおほみ空、
 かいやく星も照る月も、
 戀は樂しきものやらん、
 苦しきうちに、樂しきぞ、
 おもへばひろしわが心、
 心にうつるかげなれば。
 戀は苦しきものやらん、
 こひてふもの、誠なる。

小督局

和多野姑洗。

嵯峨野の露に咽びつゝ、
たれ松虫のこゑくゝに、

つきの光によもすがら、
なく音ぞいと哀なる。

姉と妹

竹内水彩。

いざ歸らなん姉さまよ、
はやくかへりて弟に、

花は籠にとみちにけり、
わけて喜ぶ笑かば見ん。

聞鹿

陸奥、桂脩五郎。

秋の夜長にめさむれば、
月は軒はにさえくゝて、

ひまもる風そ身にはしむ、
妻こゑ鹿のこゑかなし。

名所雪

山梨、蘭山。

宵の寒さにひきかへて、
花かどばかりみ吉野の、

今朝ぞ嬉しく思はるゝ、
よしのの山に雪のふる。

秋夜

東京、飯塚溪舟。

庭の萩はなかつちりて、

虫のなく音もたえくゝに、

いと淋しき秋の夜半、

月をかすめて雁わたる。

野梅

東京、平野葉舟。

藪に聲するうぐひすの、
彼方此方をたづぬれば、

なく音を道のしるべにて、
みつよつ咲けり梅の花。

古刀

櫻木歌二。

赤銅つくりの太刀をはき、
遠つみおやのみ功績を、

抜けば錆たり刃もかけぬ、
思へばうれし虫はしの、

ひなの夕暮

上毛、萩原丸峰。

つゝみの柳かつちりて、
家路急ぎてのべくれれば、

百舌鳥の音寒さこのゆふべ、
川そひ小田の稻の葉に、

故郷の菊

鳥の仕事をなしをへて、
吹きこそわたれ秋の風。

わがふる里の跡とへば、
菊のひともと淋しげに、

荒しまがきをよすがにて、
はゝるむさまが哀なる。

擣衣

弘前、旭櫻子。

契り置きたる人ゆゑか、
うらの苦屋に少女子が、

海邊の夕

志摩の濱邊の磯づたひ、
夕日をあらふ波の上に、

友を送る

船は浪路をおしわけて、
見えずなりけり我友の、

浦春曙

ひらだつ磯の松かげに、
波のひまよりほのくいと、

里のわらべ

散りしく木葉かき集め、
吹雪に顔を打たれつゝ、

なげきかさねて松浦の、
衣うつなり夜をこめて。

三浦櫻塙

はるかに見やる沖遠み、
とぶや千鳥の四つ五つ。

出雲、岡村多

漕ぎて行きけん白雲に、
乗たるまゝに真帆あげて。

夜をば残して須磨の浦、
いらみそめけり遠霞。

剋山人

うねれる山路迷はじと、
歸りを急ぐさとわらべ。

赤十字社看護婦

なやむいたでの武夫を、
わかき心はますらをに、

朝顔

あさがほの、花の盃つゆみちて、
せんこのうま酒を。

立秋

秋風立ちぬ葉はおちぬ、
我は昨日のまゝにして、

秋景

さや／＼秋風ふきわたる、
千草におけるしら露は、

人

言葉にしき飾れども、
あざみの花か世の人の、

出雲、津田月友

みとるもおなじ國の爲、
劣らぬいろの女郎花。

伏龍

神のめぐみを充すなり、
とく起出でし人はこよ、汝にくま

東京、野菊生

今年も半ばはすぎにけり、
世は、や昨日の色ならず。

木々の梢もあらはなり、
しばみしはなの涙かや。

京都、孤蓬

面てに綾をおほへども、
心のはりの見えざれば。

砧

蟲のなく音もうら枯れて、
月にうつらん夜をこめて、

秋夜閑居

斗藏の山に秋立ちて、
語らふ友もなくむしの、

月前秋風

そらゆく月の清けさに、
たかねの松のまつ風に、

獄屋の月

罪とは知らぬ罪ながら、
眠れる人よあふぎ見よ、

世

此世を厭ふころより、冥府の使を待たへて、
らば、恐るゝものは何かある。

信陽

柳

溪

樵

夫。

秋さりごろも賤の女が、
誰が爲急ぐわざならむ。

小

島

斗

岳。

獨りかなしき夕まぐれ、
聲にあはれを添にけり。

但

山

子。

天つ乙女やしらぶらん、
小琴の音こそ通ふなれ。

雪

子。

おきてのつなに繋がれて、
獄屋も月はさすものを。

あゝ世にいそぐ愚かさよ、

命に代へて世に在

詞藻

新體詩集終

明治廿九年二月廿九日印刷
同 年三月三日發行

定價金拾五錢

編輯者兼
發行者

大橋 又四郎
東京市本郷區上富士前町二十番地

印刷者

野村 宗十郎
東京市京橋區築地一丁目二十番地

印刷所

鐵祇夏夏築地活版製造所
東京市京橋區築地二丁目十七番地

發行所

少年園

東京府下北豐島郡
上駒込村十九番地

電話四百參拾八番

明治二十九年
改正第九版

東京游學案内

定價 金貳拾五錢
郵稅 四錢

上篇

第一章 遊學者の指針

第二章 遊學の必要

第三章 遊學の準備

第四章 修業の年限

第五章 遊學の注意

第六章 都下の學事

第七章 學校の種類

第八章 學校の規則

第九章 官立諸學校

第十章 私立諸學校

第十一章 外國學校

第十二章 私立專門學校

第十三章 私立高等學校

第十四章 私立女子學校

第十五章 私立幼稚學校

第十六章 私立補習學校

第十七章 私立職業學校

第十八章 私立短期大學

廣告

日本 上中下の三編、遊學者の指針、各丁寧精密能く事情を盡せり。郷曲父兄も亦一本を備ふべきに似たり。

國民之友 明治二十五年頃より毎年發兌し來りたるも頗る便利の書なり。上京の準備、學費の概算、着京の注意等、東京へ遊學せんとする學生には、周到に確實なり。地方少年の一讀を要す。

毎日新聞 遊學者の指針として、其上京の心得、學費の概算、着京の注意等、東京へ遊學せんとする學生には、周到に確實なり。地方少年の一讀を要す。

判評の書本 遊學者の指針として、其上京の心得、學費の概算、着京の注意等、東京へ遊學せんとする學生には、周到に確實なり。地方少年の一讀を要す。

東京府尋常中學校 東京府外十五中學校 東京府外十五高等女學校 東京府外七高等女學校 東京府外八高等女學校 東京府外一高等女學校

東京府外十五中學校 東京府外十五高等女學校 東京府外七高等女學校 東京府外八高等女學校 東京府外一高等女學校

東京府外十五中學校 東京府外十五高等女學校 東京府外七高等女學校 東京府外八高等女學校 東京府外一高等女學校

東京府外十五中學校 東京府外十五高等女學校 東京府外七高等女學校 東京府外八高等女學校 東京府外一高等女學校

東京府外十五中學校 東京府外十五高等女學校 東京府外七高等女學校 東京府外八高等女學校 東京府外一高等女學校

東京府外十五中學校 東京府外十五高等女學校 東京府外七高等女學校 東京府外八高等女學校 東京府外一高等女學校

東京府外十五中學校 東京府外十五高等女學校 東京府外七高等女學校 東京府外八高等女學校 東京府外一高等女學校

東京府外十五中學校 東京府外十五高等女學校 東京府外七高等女學校 東京府外八高等女學校 東京府外一高等女學校

東京府外十五中學校 東京府外十五高等女學校 東京府外七高等女學校 東京府外八高等女學校 東京府外一高等女學校

東京府外十五中學校 東京府外十五高等女學校 東京府外七高等女學校 東京府外八高等女學校 東京府外一高等女學校

東京府外十五中學校 東京府外十五高等女學校 東京府外七高等女學校 東京府外八高等女學校 東京府外一高等女學校

東京府外十五中學校 東京府外十五高等女學校 東京府外七高等女學校 東京府外八高等女學校 東京府外一高等女學校

東京府外十五中學校 東京府外十五高等女學校 東京府外七高等女學校 東京府外八高等女學校 東京府外一高等女學校

東京府外十五中學校 東京府外十五高等女學校 東京府外七高等女學校 東京府外八高等女學校 東京府外一高等女學校

東京府外十五中學校 東京府外十五高等女學校 東京府外七高等女學校 東京府外八高等女學校 東京府外一高等女學校

東京府外十五中學校 東京府外十五高等女學校 東京府外七高等女學校 東京府外八高等女學校 東京府外一高等女學校

東京府外十五中學校 東京府外十五高等女學校 東京府外七高等女學校 東京府外八高等女學校 東京府外一高等女學校

東京府外十五中學校 東京府外十五高等女學校 東京府外七高等女學校 東京府外八高等女學校 東京府外一高等女學校

東京府外十五中學校 東京府外十五高等女學校 東京府外七高等女學校 東京府外八高等女學校 東京府外一高等女學校

東京府外十五中學校 東京府外十五高等女學校 東京府外七高等女學校 東京府外八高等女學校 東京府外一高等女學校

東京府外十五中學校 東京府外十五高等女學校 東京府外七高等女學校 東京府外八高等女學校 東京府外一高等女學校

東京府外十五中學校 東京府外十五高等女學校 東京府外七高等女學校 東京府外八高等女學校 東京府外一高等女學校

東京府外十五中學校 東京府外十五高等女學校 東京府外七高等女學校 東京府外八高等女學校 東京府外一高等女學校

廣告

渡邊修二郎著

自轉車術 一名輪術

定價 金參拾錢
郵稅 金貳錢

東西兩洋の交通開けてより、歐米の機器を我國に傳へたること少からずと雖も、其實用上至便至利なるのみならず、同時に體育に効あり運動と共に用務を辨じ、經濟に益あり且つ之を用ゐて愉快なると、蓋し「輪」(自轉車)に及ぶもの少かるべし。此等の便益あり、故に「輪」は奢侈の具にあらざる、遊戯の具にあらざる、實に必要の具と謂ふべきなり。然るに、今日に至るまで邦人の之を用ゆる尚ほ多からざるは、何故や。蓋し未だ之を實地に試むるの人数少く、又之を試むること煩勞なるが如く、思はれ、隨て其便否を研究して、之を世に表明する者なきが故ならずや。是れ眞に遺憾の事なりとす。本書は著者自ら實驗せる所、并に歐米の新書に讀む所、或は人に聞く所を叙述し、茲に「輪」の効用と、之に對する非難とを辨明し、又輪器の事より、其廣く世に行はれんと希望するものなり。其目次大略左の如し。

- 第一章 「輪」の發明并に改良進歩
- 第二章 「輪」の効用説明
 - (一) 速度の比較
 - (二) 衛生上の効益
 - (三) 特有の便利
 - (四) 經濟上の利益
- 第三章 「輪」に對するの非難
- 第四章 「輪」を通信上に使用の成績
- 第五章 「輪」を軍事上に使用の成績
- 第六章 「輪」の種類及び附屬器具并に乗者の服裝

- 第七章 「種類」(構成及び各部の名稱)、「附屬器具」(輪の取扱ひ法)、「乗者の服裝」
- 「輪」の乗用練習法及び注意要件
- 「輪」の中心を取ることを習ふの法
- 「輪」の昇降
- 「乗者の注意要件」(世界周遊者スチーヴンスの文)
- 「輪」の全形
- 「輪」各部の解割
- 「輪」の油器
- 「球及び調整環の内部
- 「乗用靴
- 「上輪の法
- 「隻手を離して乗輪す

挿畫

中學程度

作文大成

洋裝美本
定價 金四拾錢
郵稅 金六錢

此書は、分ちて六篇となす、**作文の要訣**、**修辭學一斑**、**文體の辨**、**作文の軌範**、**譯文法**、**復文法**、**助字詳解**を以て、**作文の要訣**は、廣く作文に關する古今内外の名論卓説を參酌し、且つ熟ら今日に於ける中等教育の程度を稽査して、學者の文を作るに、必ず先づ知らざる可からざる要訣數十則を説述し、第二篇修辭學一斑は、泰西修辭法の概略より、話色の効用彙類に説き及ぼし、我邦雅俗の文章に就て最も面白き適例を撮集せり。第三篇作文の軌範は、古今の名文中より、最も今日以後に於ける普通文の典則となるべきもの數十篇を精選し、一々文法字訣を剔抉して、文海の指鍼とせり。通文の學ぶには體裁を知るを以て至要となす。吳訥の文章辨體、徐師魯の文體明辨、共に善本ありと雖も、説く所過詳にして、却て初學者の依據に苦むの恐れあり。是れ特に此書第三篇文體の辨ある所以なり。第五篇譯文法、第六篇復文法は、譯文及び復文の手段方法を説述して復た餘蘊なし。附録助辭詳解は、主として助辭の本義を釋ね、旁ら虚字疑字の異同を辨じて、初學文を作るもの、資となせり。「讀賣新聞」本書を評して曰く「少年をして、正則に従ひ、快活なる進歩を得しめんと、の趣旨にて、古今諸名家の、文章の其尤も簡明なるものを選び、**叮嚀反覆**、**精細なる解釋**を施し、只管解り易きを務めたり。初學これを繙けば、**一目瞭然**、曉るところあるべし。呼んで**作文の捷徑**となすも、恐らくは誣言ならざらん。好少年、宜しく座右に供して可なりと「國會」も亦評して「本書は、日ごろ我少年者に忠實なる『文庫』記者の編する所にして、作文法に關する細大の事柄を網羅し、以て精密なる解釋を附したるものなれば、後來文を作らむとする初學者の伴侶としては**最上の良書たり**」云々。亦以て本書の價值を知るに足らん。

廣告

廣告

商工業及貿易案内

定價 金廿五錢 郵稅 金四錢

今や四海交通、商工業の業殆ど舊時の狀況を一變し、一國一土の小區域に經營すべからざるに至れり。商工業者に於ても、亦往日の如く、父祖相傳の業に安んじ、舊風を墨守すべきにあらざる、必ずや今の時勢に應ずるの智識と大伎倆を備へざるべからず。然らずんば意外の大失敗を取るべきは、近時舊來の商工業者の多く倒れたるを以ても知るべきなり。現今の商工業者たるもの、將來の商工業者たらんとするもの、亦難からずや。

夫れ知らざるの路を行く者、之が嚮導を要す。茫茫たる海洋を航する者は、必ず羅針を要す。今の商勢の進轉急流の如くなる時に方りては、商工業者、殊に少壯商工業者の爲めに、嚮導たり指針たるものなかるべからず。近來各地方に商工業専門の學校其設立を見ざるにあらざる、且既に商工業に従事し居る者、を取扱ふの傾向あるを免れずして、往々高尚に趨るの弊なきにあらざる、且既に商工業に従事し居る者、并に家貧にして學校に入るを得ざる者あり、此等の者の中、決して有爲の人物なしと云ふべからず。此書は、主として此等の急に應ずる爲めに編述したるものにして、商業及び商業と密接の關係ある製造工業の事を記し、殊に外國貿易の手續を述べ、記事専ら實際に近きを務め、敢て高遠の理論を贅せず。書中分ちて三部となす、其目次大略左の如し。

- 緒言
- 第一部 商業要件
- 第一章 商業教育
 - 第二章 實業資本 懸拂と現金
 - 第三章 信用
 - 第四章 投機と商業の別 商況の變
 - 第五章 商用書類 計算簿
 - 第六章 商業會社の組織 商業組合
 - 第七章 歐米との貿易
 - 第八章 内外商工業の競争
- 第二部 支那及び印度貿易
- 第九章 支那人の取引 輸出重要
 - 第十章 輸出品 米 茶 銅 石炭
 - 第十一章 輸入品 嗜好
 - 第十二章 各種類 煙草 將來の見込
 - 第十三章 樟腦業
 - 第十四章 臺灣の茶業
 - 第十五章 支那人の取引 輸出重要
 - 第十六章 支那人の取引 輸出重要
- 第三部 現行關稅表
- 第十七章 支那商人 支那の商勢
 - 第十八章 支那の貨幣 支那に於ける
 - 第十九章 日本銀貨 銀行
 - 第二十章 上海の商工業
 - 第二十一章 蘇州杭州の商工業
 - 第二十二章 合資事業
 - 第二十三章 印度商工業の概況
- 附錄
- 臺灣の通貨及び度量衡
 - 内外度量衡并貨幣比較表

詩學捷徑

洋裝 美本 定價 金廿五錢 郵稅 四錢

此の寸珍 美本平生 必須のもの、廿 決して不廉と云ふべからず。(毎日新聞)

五錢の定價 本書は、全編を(第一)作詩心得(第二)韻字箋(第三)作詩便覽(第四)通用文字等に類別し、種々古大家の作詩を引證して作詩の法を懇篤詳細に説明したるものなれば、斯道に最も有益なる良書なり。(國會)

總クローヌ製袖珍の美本、而も 嗚呼此の書一度出で、幼學便覽遂に顔色なからん乎。(少年世界)

作詩法を、開發教授の精神を酌み、順序よく講説し、作例清新、製本美麗、最も少年の獨習に適するを覺ゆ。(小國民)

本書の特色は、徒に幼學便覽、詩語粹金、詩學精選の故態を踏襲せず、作詩心得最も今日の別切なる要訣を説き、作詩便覽に於ては題目熟字の撰定に注意し、詠櫻花、祝開校、溫泉、願征清鋒、讀威海衛戰記、博覽會等の目あり。吾人は此美麗なる冊子を取りて、詩學の捷徑として江湖に推薦するに吝ならず。(精美)

袖珍二百五十六頁の好冊子にして、今様に撰し、へたる幼學便覽と、詩話、詩法など興ある節々を纂輯したる所此書もいふべきもの、韻字箋作詩便覽の外、卷首に作詩心得を加へて、詩話、詩法など興ある節々を纂輯したる所此書(早稲田文學)

初學の作詩家を自當てに編せられし書物、明瞭に簡易に、作詩心得を説き以て作詩便覽に及びたる(教育時論)

廣告

五

廣告

習文錄

定價 金貳拾錢 第壹卷既刊第貳卷印刷中
六冊前金壹圓郵稅 貳 錢 宛

時事新報

「習文錄」は、悲哀、慷慨、滑稽等の諸文體につき、先づ初學者の注意を掲げ、次に作者が作りたる詩歌文章を掲げて、評語を加へ、疵瑕を正し、以て文を學ぶもの、陥り易き弊をば指摘したり。編者の用意周到なりと云ふべし。

日本

青年の爲めに作文の法を説きたるもの、坊間の書と其趣を異にする所あり。

朝野新聞

始めに作文の法を論じ、本邦の古文を引きて之を評隲す。頗る初學に益あり。又青年文淵の欄を設けて時

小國民

作文法と、絶妙の古文とを、興味の一深さを覺ゆ。青年文淵には、投親切なる添削の痕さへ明なり。

明治評論

是れ其名の如く少年文を學ぶ者の爲めに編せるもの、其文體を、悲哀、慷慨、滑稽等に別ちて、各々文例を加へ、且つ章法句法等を剖析して、一々作文の要訣を示したる親切丁寧なりと謂ふべし。

文を奨勵す。更に大に善し。

廣告

やまと新聞

文を修むるの書世に乏しからずと雖も、多くは是れ徒らに外観皮相に齷齪くもの少なし。意定まらず、是れ文にあらざる、唯句々文字を列ぬるのみ。今此「習文錄」を見るに、之に反して、全く之に反して、先づ各例を擧げて文の旨を分ち、更に意より説きて文字の上に及ぶ。故に、讀む人先づ其意思の發達を充分にし、且つ文字の布置如何を悟るに足らん。寔に文を修むるの法斯くの如くにして、初めて雲起り風生ずる底健筆を縦にするを得べし。

日本人

章を作るの方法、文を作るの工夫、文を作るの秘訣、文體、文題、文法を知らざるべからざる事、悲哀の文、慷慨の文、手紙の文、及び滑稽の文に分ちて、詳細に作文の法を説明し、且つ章毎に古人の作一篇づゝを附す。能文家とならんと欲するの士はそれ熟讀せよ。

早稻田文學

少年園嚮には「少年文範」を出だし、今また此書を公にす。世の少年者の爲めの工夫、「文を作るの訣」「悲哀の文」「慷慨の文」「文體及び文題」「滑稽の文」等の諸項に分ち、細かに作文上の要條を叙説し、其實例として其項の末に我が古名家の文章一篇づゝを附し、且一々これに評註を挿みたり。又卷末には少年者の手に成れる叙事文、論説文等數篇を載せ、叮嚀に其瑕疵を指摘訂正したるなど、指南車といふべし。

少年詞藻

改正 第壹號 定價金拾貳錢 郵稅金貳錢

玉玲瓏、金燦爛、

江湖少年青年諸君の寄せせらるる詩歌文章は、本園の編輯室内に積みみて

久しく筐底に蔵するは、獨り諸君の芳志を空にするのみならず、紙面に乏しき故を以て是等の名篇傑作を

『少年詞藻』は、**學海の遺珠**を集むる目的を以て編輯したるものなるが、嚮に本書を發刊する

の後忽ち數千部を賣盡し、市場に跡を絶てるや久し。是に於てか本園は再び本書を出版して、讀者諸君

が折角の高需に應ずべき筈なれども、同じく割闕に附するならば、舊を避けて新に就くの寧ろ優れる

に若かざるを思ひ、全然舊版を改めて、**改正**本園の第壹號は、嚮に**競争文の精華**を收め、

斬新生氣ある現時の文案に改めたり。**時事**本園の募集せる**論文**をも採録するの自由を**雄篇佳**

殊に本園月刊の『文庫』『青年文』等、學術雜誌の範圍に於ては掲載すること能はざる、**作**斷じて疑はざる所なり。

文中、醉茗君新作の小説、刀水漁郎、和多野流水、阿部俊朗、金子薰園、飯田黄雲等諸君の記文、

野島文卿、高橋華川、五島靖市郎、山口菊十郎、松桃庵等諸君の論文、佐藤橘香、藤江亞山、熊井

湖畔等諸君の感慨文、哀悼文、伊良子暉造、葉末露子、峽月子等の新體詩、これを始めとして、

優良の詩歌文章極めて多し。江湖の少年青年諸君、請ふ愛顧の榮を賜へ。